

県営ほ場整備事業（元永地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告3

辻垣下出口遺跡

行橋市文化財調査報告書 第66集

2020

行橋市教育委員会

辻垣下出口遺跡

行橋市文化財調査報告書 第66集

2020

行橋市教育委員会



辻垣下出口遺跡遠景（南から）

序

本書は、平成13年度に県営ほ場整備事業（元永地区）の工事に先立ち実施しました、辻垣下出口遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する仲津校区は出土品が国の重要文化財に指定されている稲童古墳群や京都平野の最後の前方後円墳とされる単人塚古墳など多くの遺跡が知られています。今回の調査では主に弥生時代から鎌倉時代に至る多様な遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われれます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、福岡県行橋農林事務所、元永土地改良区、福岡県教育委員会、地元区の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

令和2年3月

行橋市教育委員会

教育長 長尾 明美

例 言

1. 本書は、福岡県行橋市大字辻垣 527・528・529・536 に所在する辻垣下出口遺跡の発掘調査報告書である。
県営ほ場整備事業(元永地区)の工事に伴い、国、県の補助を受け、平成 13 年度に発掘調査を実施した。
2. 調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。
調査組織は第 1 章第 2 節に記す。
3. 遺構の実測は伊藤昌広、工藤祥子、佐藤愛子、谷口貞子、中島裕子、平川倫広、古木初子、本田久代が行った。
4. 遺構写真は伊藤が撮影した。空中写真撮影は有限会社スカイサーベイに委託した。
5. 遺構図の整理は奥野康代、鎌田尚子、松尾留衣、山口裕平が行った。
6. 遺物の接合・復元は、河田まき子、所村裕香、中川美登里が行った。
7. 遺物の実測は奥野、河田、所村、中川、山口が行った。
8. 遺物写真は山口が撮影した。
9. 遺構・遺物等図面の浄書は奥野、鎌田、松尾が行った。
10. 本書に使用した遺構の略号は SB (掘立柱建物)、SK (土坑)、SE (井戸)、SD (溝)、SA (柵列)、SX (不明遺構)、SP (柱穴) である。
11. 出土した陶磁器の分類は太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』(太宰府市の文化財第 49 集) による。
12. 本書に使用した方位は、世界測地系に基づく座標北である。
13. 報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。
14. 本書の執筆および編集は、山口が行った。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 経緯と経過	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 辻垣下出口遺跡	7
第4章 結語	45

図版目次

巻頭図版1	辻垣下出口遺跡（南から）
図版 1	辻垣下出口遺跡の位置
図版 2	辻垣下出口遺跡全景（上が南東）
図版 3	1. SK011 遺物出土状況（南東から） 2. SK011（南東から） 3. SE041（南東から）
図版 4	1. SD051（南西から） 2. SD051 白磁小壺出土状況 3. SD052（北東から）
図版 5	出土遺物 1
図版 6	出土遺物 2
図版 7	出土遺物 3
図版 8	出土遺物 4

挿図目次

第 1 図	辻垣下出口遺跡調査区域図（1/10,000）
第 2 図	辻垣下出口遺跡の位置（1/2,000,000）
第 3 図	行橋市周辺の地形分類図（1/100,000）
第 4 図	行橋市周辺の地質図（1/100,000）
第 5 図	京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）
第 6 図	SB 001 実測図（1/60）
第 7 図	辻垣下出口遺跡遺構配置図（1/400）

- 第 8 図 SK011 実測図 (1/60)
- 第 9 図 SK011 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 10 図 SK012・013 実測図 (1/60)
- 第 11 図 SK012 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 12 図 SK014・015 実測図 (1/60)
- 第 13 図 SK014 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 14 図 SK016 実測図 (1/60)
- 第 15 図 SK016 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 16 図 SK017 実測図 (1/60)
- 第 17 図 SK017 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 18 図 SK018 実測図 (1/60)
- 第 19 図 SK018 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 20 図 SK019 実測図 (1/60)
- 第 21 図 SK019 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 22 図 SK020 実測図 (1/60)
- 第 23 図 SK020 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 24 図 SK021・022 実測図 (1/60)
- 第 25 図 SK023・024 実測図 (1/60)
- 第 26 図 SK023 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 27 図 SK025 実測図 (1/60)
- 第 28 図 SK025 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 29 図 SK026 実測図 (1/60)
- 第 30 図 SK026 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 31 図 SK027 実測図 (1/60)
- 第 32 図 SK027 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 33 図 SK028 実測図 (1/60)
- 第 34 図 SK028 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 35 図 SK029・030 実測図 (1/60)
- 第 36 図 SK031 実測図 (1/60)
- 第 37 図 SK031 出土遺物実測図 (1/3)
- 第 38 図 SK032～034 実測図 (1/60)
- 第 39 図 SE041 実測図 (1/60)
- 第 40 図 SD051 実測図 (1/200)
- 第 41 図 SD051 出土遺物実測図 1 (1/3)
- 第 42 図 SD051 出土遺物実測図 2 (1/3)
- 第 43 図 SD051 出土遺物実測図 3 (1/2・1/3)
- 第 44 図 SD052 実測図 (1/200)
- 第 45 図 SD052 出土遺物実測図 (1/2・1/3)
- 第 46 図 SD053 実測図 (1/200)

第 47 図	SD053 出土遺物実測図 (1/3)
第 48 図	SD054 実測図 (1/300)
第 49 図	SD054 出土遺物実測図 (1/3)
第 50 図	SD055 実測図 (1/200)
第 51 図	SD055 出土遺物実測図 (1/2・1/3)
第 52 図	SD056 実測図 (1/100)
第 53 図	SD056 出土遺物実測図 (1/3)
第 54 図	SD057 実測図 (1/200)
第 55 図	SD057 出土遺物実測図 (1/3)
第 56 図	SD058 実測図 (1/200)
第 57 図	SD058 出土遺物実測図 (1/3)
第 58 図	SD059 実測図 (1/100)
第 59 図	SD059 出土遺物実測図 (1/3)
第 60 図	SD060～062 実測図 (1/100)
第 61 図	SD063 実測図 (1/200)
第 62 図	SD063 出土遺物実測図 (1/3)
第 63 図	SD064 実測図 (1/200)
第 64 図	SD064・SX084 出土遺物実測図 (1/3)
第 65 図	SD065 実測図 (1/100)
第 66 図	SD065 出土遺物実測図 (1/3)
第 67 図	SA071・072 実測図 (1/60)
第 68 図	SA071 出土遺物実測図 (1/3)
第 69 図	SX081～084 実測図 (1/100)
第 70 図	SX081 出土遺物実測図 (1/3)
第 71 図	SP 出土遺物実測図 (1/3)
第 72 図	表土出土遺物実測図 1 (1/3)
第 73 図	表土出土遺物実測図 2 (1/2・1/3)
第 74 図	包含層トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

表 目 次

表	1	出土遺物観察表 1
表	2	出土遺物観察表 2
表	3	出土遺物観察表 3
表	4	出土遺物観察表 4
表	5	出土遺物観察表 5
表	6	出土遺物観察表 6
表	7	出土遺物観察表 7

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

本書で報告する辻垣下出口遺跡は、県営ほ場整備事業元永地区の工事に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査で発見された遺跡である。平成12年度に試掘調査を行い、辻垣下出口遺跡、代遺跡の2遺跡を確認した。このことより行橋市教育委員会は事業主体である福岡県行橋農林事務所および元永土地改良区と協議を行い、平成13年度に辻垣下出口遺跡の4,900㎡を対象に記録保存を目的とした発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査には平成13年4月13日に着手した。当初は調査の妨げになるビニールハウスの骨組み等の撤去を行い、5月14日より重機による表土剥ぎを開始した。5月21日から発掘作業員による遺構検出および掘り下げを開始した。それと併行し、6月4日より調査区内に10mグリッドを設定し、縮尺100分の1で平板測量図（遺構配置図）の作成を開始した。6月12日からは、縮尺20分の1で遺構の実測も行っていった。遺構の写真撮影は35mm白黒フィルム、35mmカラーリバーサルフィルムを使用し、調査の進展に沿って順次行った。また調査終盤の8月10日には、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。8月28日に調査機材等を撤去し、9月3日に発掘調査を終了した。

遺物の復元や実測、遺構図の製図などの整理作業は、調査担当者の伊藤昌広の下で平成13年度より断続的に行われてきた。しかし平成24年度に調査を担当した伊藤が急逝したため、これらの作業を山口裕平が引き継ぐこととなった。そして平成31年度に国庫補助事業として整理作業を本格的に行い、本書を刊行する運びとなった。調査体制は次節に示す通りである。



辻垣下出口遺跡を調査中の伊藤昌広氏

第2節 調査体制

現地調査（平成13年度）

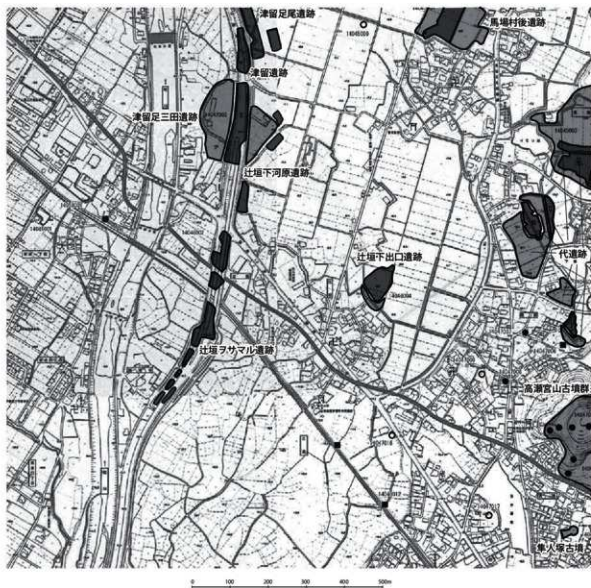
総括	行橋市教育委員会	教育長	徳永 文昭
		教育部長	武内 清
調査		教育部 生涯学習課長	森 敬太郎
		教育部 生涯学習課長補佐兼文化係長	奥 広俊
		教育部 生涯学習課 文化係	細川 義之
		教育部 生涯学習課 文化係	小川 秀樹
		教育部 生涯学習課 文化係	伊藤 昌広（調査担当）
		教育部 生涯学習課 文化係	中原 博
庶務		教育部 生涯学習課 文化係	上原 圭三

発掘調査作業員

赤波江 静代 秋永 芳子 朝比奈 日波 有松 直子 池田 保 池部 ミエコ 猪之鼻 範夫
今村 美香 上田 奈緒美 浦田 秋子 小野田 トミエ 加来 博 角田 義彦 北本 悦子
工藤 祥子 笹原 トミエ 佐藤 愛子 清水 勝子 志水 ゆき子 新保 初枝 谷口 貞子
千葉 保保 中島 裕子 納富 真砂子 浜本 義子 原田 アサ子 平川 倫広 廣津 宏一
福田 トシ子 古木 初子 本田 久代 宮崎 信美 村上 眞弓 村田 イツ子 山田 一友
吉松 勇

報告書作成（平成31年度〔令和元年度〕）

総括	行橋市教育委員会	教育長	笹山 忠則（～4月30日）
		教育長	長尾 明美（1月1日～）
		教育部長	米谷 友宏
調査		教育部 文化課長	小川 秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係長	山口 裕平（報告書担当）
		教育部 文化課 文化財保護係	天野 正太郎
		教育部 文化課 文化財保護係	笠置 拓也
庶務		教育部 文化課 文化振興係長	吉兼 三佳
		教育部 文化課 文化振興係	姫野 和彦
		教育部 文化課 文化振興係	長尾 萌佳
整理作業員	奥野 康代 鎌田 高子 河田まき子 所村裕香 中川美登里 松尾 留衣		



第1図 比埴下出口遺跡調査区域図（1/10,000）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に位置する（第2図）。この地域は明治23年（1890）の郡制公布で置かれた京都郡、築上郡の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口73,294人（令和2年1月末日現在）を擁す。市域は東に周防灘を望む京都平野の中央部を占める。この平野は律令制以降、上述の郡制公布まで置かれた京都郡、仲津郡、築城郡の3つの郡域にまたがるが、行橋市は市の北側が旧京都郡域、南側が旧仲津郡域にあたる。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と市町境を画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、観山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祇川をはじめ、小波瀬川、長峽川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、周防灘に注ぐ。

本書で報告する辻垣下出口遺跡は祇川下流域右岸の三角州に立地する。

第2節 歴史的環境

京都平野における人類の足跡は、今から約3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼる。市域では渡築し遺跡C区で、該期の尖頭状石器、台形様石器、削器、剥片などが火山灰層からまとまって出土し、石器製作を行っていた跡と考えられる。このほか鬼熊遺跡、入覚大原遺跡などで旧石器が見つかっている。

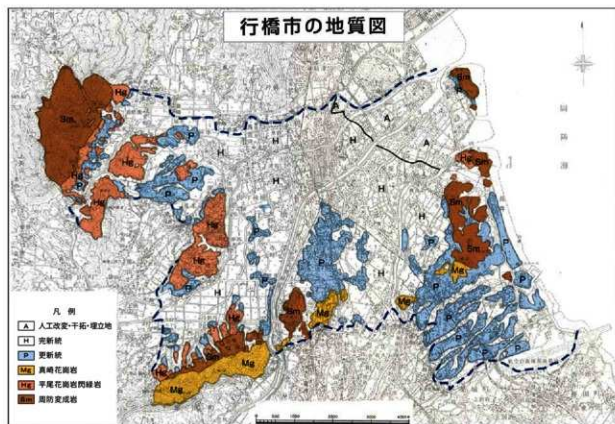
続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは中期の約4800年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸から昭和時代の干拓によって、葦島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第5図）。市域の縄文時代の様相は発掘事例が少なくあまり明確ではないが、当時の今川河口部に近い宝山に貝塚が存在した。遺構は長者原遺跡、長井丸尾遺跡で後期の住居跡が1軒ずつ確認されているにすぎないが、土器は早期の押型文土器、前期の曾畑式



第2図 辻垣下出口遺跡の位置（1/2,000,000）



第3図 行橋市周辺の地形分類図 (1/100,000)



第4図 行橋市周辺の地質図 (1/100,000)

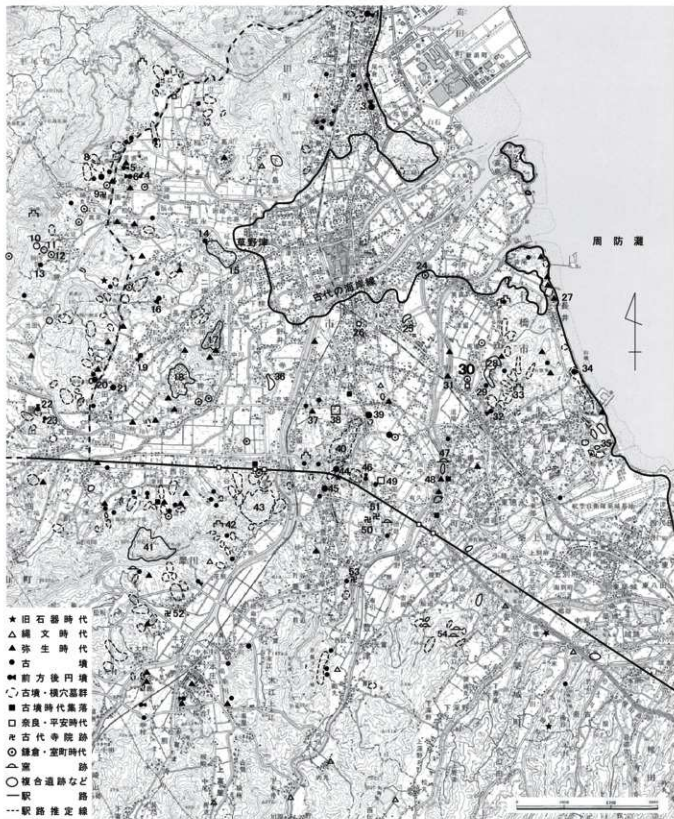
土器、^{とどま} 土器、^{とどま} B式土器、後期の西平式土器、石器は早期のトロトロ石器、後期的大型打製石斧など各期の遺物が徐々に知られるようになってきた。

2600年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。弥生時代の遺跡は早期より見られ、夜白式土器や続く前期初頭の板付1式土器が出土する長井遺跡や辻垣遺跡群がある。近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査で確認された矢留堂ノ前遺跡では前期の環濠集落が見つかった。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下種田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。なかでも下種田遺跡では竪穴住居やそれに伴う多くの貯蔵穴が発掘された。谷部の湿地帯では木製農具も見つかっており、石斧や石庖丁、石剣などの多くの石器も発見された。貯蔵穴からは炭化したコメに加え、淡水産や海水産の貝殻、魚骨なども見つかっており、稲作を行いながら、狩猟、採集、漁撈と多様な生活様式であったことが分かる。代わって後期の遺跡には下崎ヒガンデ遺跡、代遺跡などが知られる。後期末から古墳時代への過渡期は、いわゆる『魏志倭人伝』に見られる「邪馬台国」の時代であり、京都平野にも「国」があったと想定される。その国の中心集落(国邑)の第一候補が延永ヤヨミ園遺跡である。調査した範囲のみで200軒程の竪穴住居があり、一定の区画を囲んだ居館の存在も想定されている。延永ヤヨミ園遺跡は内海に面しており、瀬戸内海を介して近畿や瀬戸内地方との交流拠点であったとも考えられる。

京都平野における本格的な古墳時代は、3世紀末～4世紀初頭頃に三角縁神獣鏡を副葬した石塚山古墳(菊田町)の築造に始まる。その後、平野内の首長墓の系列は4世紀末頃のピワノクマ古墳、5世紀前半の御所山古墳(菊田町)、5世紀末の番塚古墳(同)と続き、6世紀には八雷古墳、扇八幡古墳(みやこ町)、庄屋塚古墳(同)、箕田丸山古墳(同)が築かれる。これら最有力層の前方後円墳が築かれるのは、いずれも旧京都郡域で、その多くは各時期において豊前地域で最大級の規模を有し、旧京都郡域を拠点とする首長層が傑出した勢力を保持していたことを物語っている。一方平野の南東域を占める仲津郡域の前方後円墳出現は稲童古墳群の盟主墳である5世紀中頃の石並古墳を嚆矢とし、6世紀後半の単人塚古墳をもって終息する。前方後円墳の築造の終息にとともに、地域の首長墓は旧京都郡においては、橋塚古墳(みやこ町)、綾塚古墳(同)、旧仲津郡においては、彦徳甲塚古墳(同)、甲塚古墳(同)といった巨大な横穴式石室を内部主体とする大型の円墳や方墳に移行する。一方、6世紀頃より家父長制社会が成立し、造墓が支配者層に留まらず浸透していき、群集墳や横穴墓の築造が盛んになった。全国的にみても京都平野は古墳の宝庫であり、平尾台や観音山、観山山麓、御所ヶ岳、馬ヶ岳の山麓など平野の縁辺部に濃密に分布する。特に竹並横穴墓群は1,000基近い横穴墓が発掘調査され、未調査及び調査以前に破壊された横穴墓を加えると約1,500基の一大墳墓域である。

7世紀は古代史上の飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。8世紀前半までに京都郡に椿市麩寺、仲津郡では上坂麩寺、木山麩寺が創建され、8世紀中葉には豊前国分寺、豊前国分尼寺が創建された。またこの頃、唐や新羅との緊張関係の高まりに伴い、御所ヶ岳の北麓に全長約3kmにわたり城壁を巡らせた山城(御所ヶ谷神籠石)が築かれた。

豊前国の国府は『倭名類聚抄』に京都郡に所在すると記載されるが、比定地が確定しなかったため長く議論されてきた。みやこ町国作・惣社地区で見つかった官衙遺跡が国府跡と確定したが、この遺跡は8世紀前半以前の様相が明確でないため、東九州自動車道建設に伴い発掘調査された福原長者原官衙遺跡がこれに先行する豊前国府、あるいは豊前国と豊後国にまたがる「豊国」を支配する役所であった可能性が指摘されている。御所ヶ谷神籠石の北麓を駅路(古代官道豊前路)が東西に走り、丘陵の切り通しや発掘調査の際に遺構が確認されている。また延永ヤヨミ園遺跡で「津」墨書土器が出土し、『類聚三代格』にみえる「草野津」の所在地がほぼ確定した。



第5図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

第3章 辻垣下出口遺跡

辻垣下出口遺跡の発掘調査は県営ほ場整備事業元永地区の工事に先立ち行った。調査区の行政地番は福岡県行橋市大字辻垣字下出口 527、528、529、536 番地で、調査面積は 4,900m²である。

調査の結果、掘立柱建物 (SB) 1 軒、土坑 (SK) 24 基、井戸 (SE) 1 基、溝 (SD) 15 条など多数の遺構を検出し、土師器、須恵器、白磁、青磁など多種多様な遺物が出土した。調査区の層序は黒褐色土 (耕作土) の 1 層のみである。遺構検出面 (地山) は茶褐色砂質土で、遺構の埋土は総じて黒褐色砂質土であった。

(1) 掘立柱建物

SB001 (第 6 図)

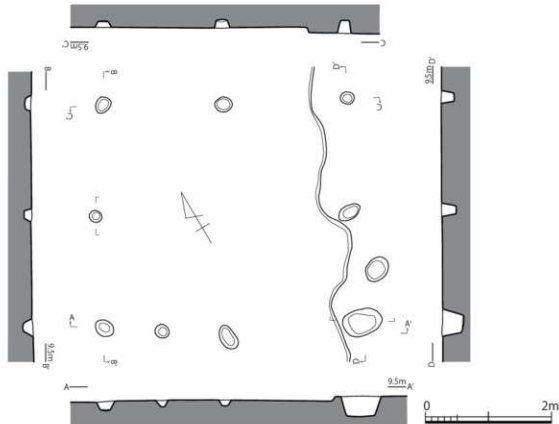
調査区の中央西寄りで検出した 2 間×2 間の掘立柱建物である。方位は東側の柱列で N-31°-E にとる。桁行 3.9m、梁行 3.6m。柱間は南北側で 1.95m、東西側で 1.8m と整った柱穴配置をとる。柱穴は径 20~60cm、深さ 10~30cm を測る。柱穴より土師器、土師質土器が出土したが、小片のため図示できなかった。

(2) 土坑

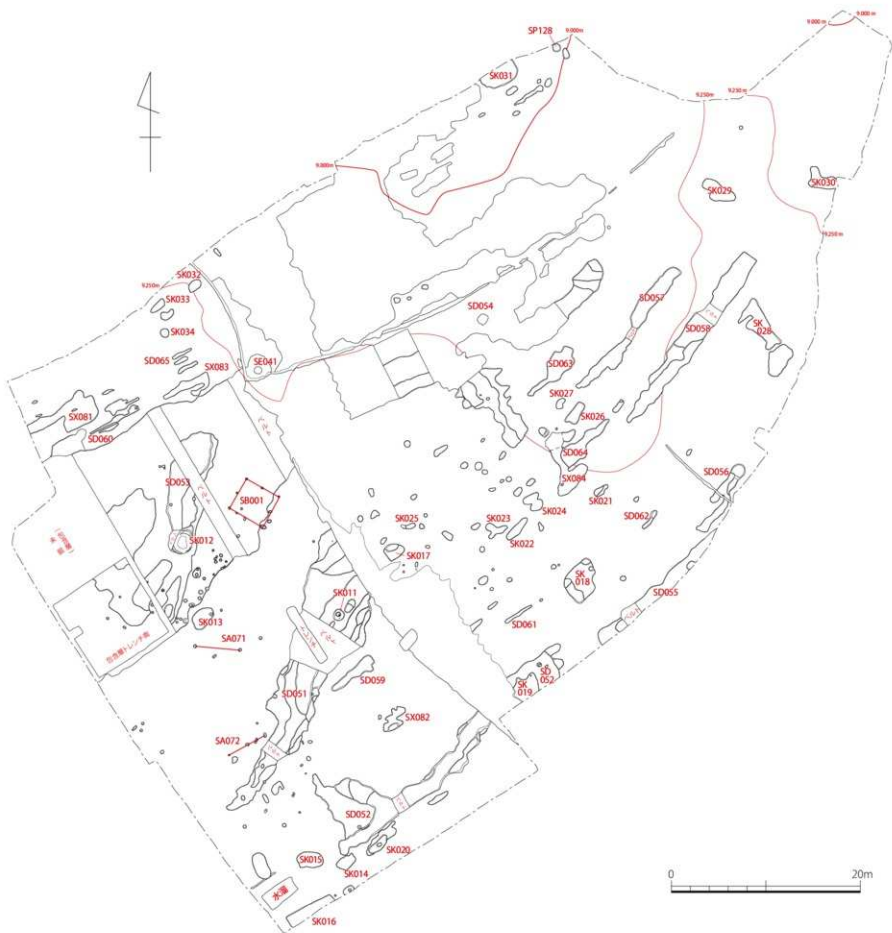
SK011 (第 8・9 図、図版 3・5)

調査区の中央西寄りで検出した。SD051 の底面にある。円形を呈した 2 段掘りの土坑で、径 1.2m、深さ 0.6m を測る。井戸の可能性もある。土師器と瓦器が出土した。

土師器 1~3 は埴。1・2 はほぼ完形で、1 は口径 16.0cm、器高 5.0cm、2 は復元口径 16.2cm、器高 5.0



第 6 図 SB 001 実測図 (1/60)



第7圖 社壇下出口遺跡遺構配置圖 (1/400)

cmを測る。3は体部から高台部の破片である。

瓦器 4は埴。ほぼ宍形で、口径15.8cm、器高5.5cmを測る。

SK012 (第10・11図、図版5)

調査区の西寄りで検出した。SD053を切る。長楕円形を呈し、長軸3.3m、短軸1.9m、深さ1.05mを測る。須恵器、瓦器、白磁などが出土した。

須恵器 5・6は甕。5は頸部から肩部の破片。外面はカキメ後にタタキを施し、内面に青海波文当具痕を残す。自然軸が付着する。6は胴部片。調整は5と同様である。

土師器 7・8は小皿。いずれも底部片で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

瓦器 9～10は埴。いずれも底部から高台部の破片。11は小皿。ほぼ宍形で、口径8.45cm、器高1.5cm。

土師質土器 12は鍋。口縁部から体部の破片で、外面にスガが付着する。

須恵質土器 13は鉢。底部片で、いわゆる東播系の捏鉢である。

白磁 14・15は碗。口縁部から体部の破片で、いずれも口縁端部は玉縁になる。

石製品 16は滑石製石鍋。底部片で、外面にスガが付着する。

SK013 (第10図)

調査区の西寄りで検出した。SA071に近接する。楕円形を呈し、長軸2.75m、短軸1.75m、深さ0.2mを測る。出土遺物には土師器、瓦器、白磁などがあるが、小片のため図示できなかった。

SK014 (第12・13図)

調査区の南西側で検出した。SK015・016、SD052などが近接する。やや歪な長方形を呈し、長軸2.0m、短軸1.35m、深さ0.15mを測る。出土遺物には土師器、土師質土器、青磁などがあり、青磁を図示した。

青磁 17は碗。いわゆる同安系の体部小片で、内面に櫛点描文、外面に櫛描文を施す。

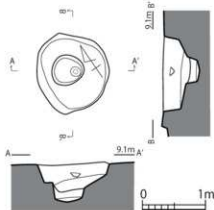
SK015 (第12図)

調査区の南西側で検出した。SK014・016、SD052が近接する。隅丸長方形を呈し、長軸2.75m、短軸1.7m、深さ0.1mを測る。出土遺物には土師器があるが、小片のため図示できなかった。

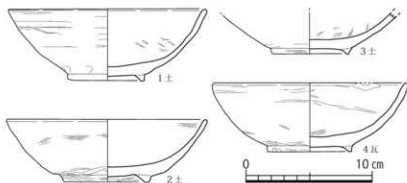
SK016 (第14・15図)

調査区の南西端で検出した。SK014・015が近接する。南側は調査区外へと広がる。長方形を呈すると考えられ、長辺5.15m、短辺は1.3m、深さ0.1mを測る。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器などがあり、須恵器を図示した。

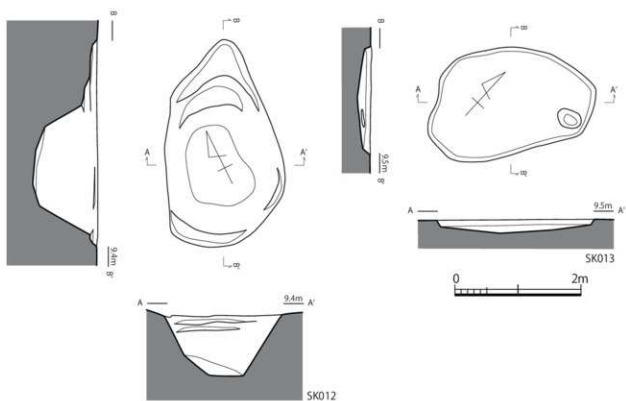
須恵器 18～20は甕。いずれも胴部の小片で、外面に平行タタキを施し、内面に当具痕を残す。19・20は当具痕をナデ消している。



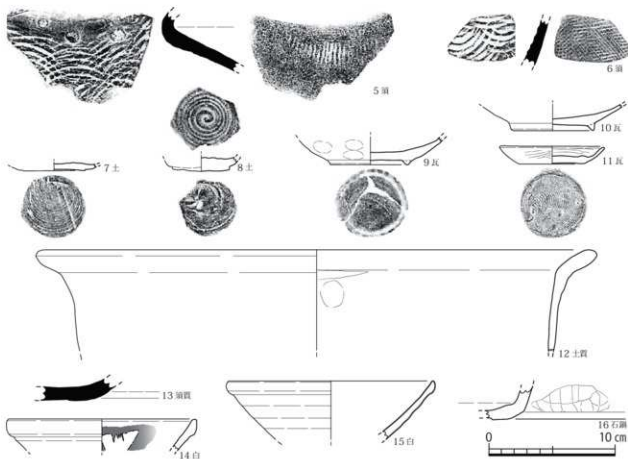
第8図 SK011 実測図 (1/60)



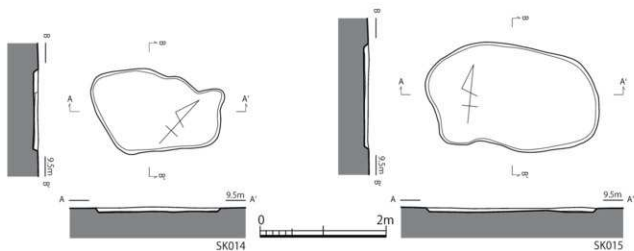
第9図 SK011 出土遺物実測図 (1/3)



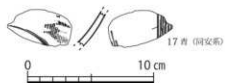
第10図 SK012・013 実測図 (1/60)



第11図 SK012 出土遺物実測図 (1/3)



第12図 SK 014・015 実測図 (1/60)

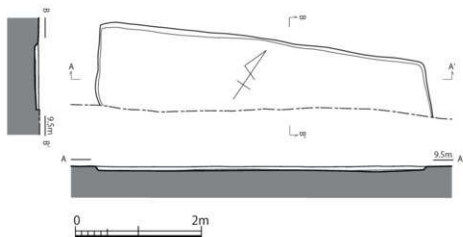


SK017 (第16・17図、図版5)

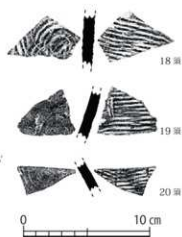
調査区の中央で検出した。やや歪な三角形を呈し、一辺1.5～2.0m、深さ0.1mを測る。出土物には土師器、須恵器、中国陶器があり、中国陶器を図示した。

第13図 SK 014 出土遺物実測図 (1/3)

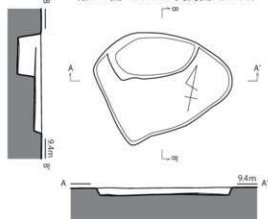
中国陶器 21は裏。口縁部片で、端部はΓ形を呈し、下に2



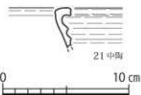
第14図 SK 016 実測図 (1/60)



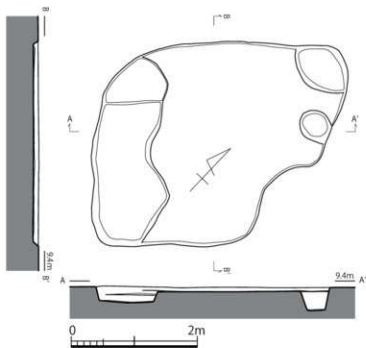
第15図 SK 016 出土遺物実測図 (1/3)



第16図 SK 017 実測図 (1/60)



第17図 SK 017 出土遺物実測図 (1/3)



第18図 SK 018 実測図 (1/60)



第19図 SK 018 出土遺物実測図 (1/3)

条の突帯をめぐらす。釉葉は灰黄色を呈す。

SK018 (第18・19図、図版5)

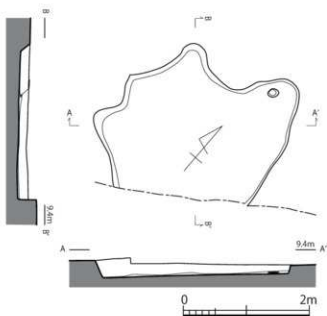
調査区の中央南寄りで検出した。やや歪な菱形を呈し、長軸4.85m、短軸3.3m、深さ0.1mを測る。複数の遺構に切られている。出土遺物には土師器、瓦器、土師質土器、青磁、土製品などがあり、土師質土器と土製品を図示した。

土師質土器 22 は銅。口縁部の小片で、外面にススが付着する。

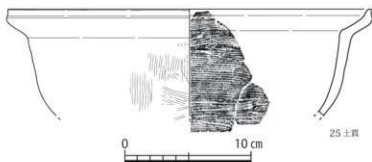
土製品 23 は棒状土製品。上部を欠損し、現状で長さ9.7cmを測る。用途は不明。24 は有孔土錘。完形で棒状を呈す。長さ4.7cm、幅1.2cmを測る。漁網錘である。

SK019 (第20・21図、図版5)

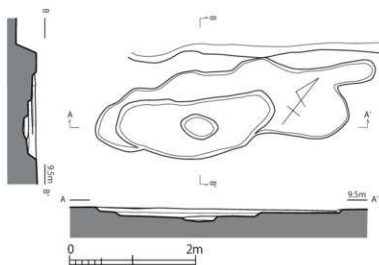
調査区の中央南端で検出した。SD052を切り、南側は調査区外へと広がる。不整形で検出できた範囲で、長軸3.3m、短軸2.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物には土師器、瓦器、土師質土器、白磁青磁などがあり、土師質土器を図示した。



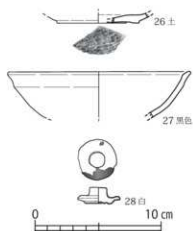
第20図 SK 019 実測図 (1/60)



第21図 SK 019 出土遺物実測図 (1/3)



第22図 SK020 実測図 (1/60)



第23図 SK020 出土遺物実測図 (1/3)

土師質土器 25 は鍋。口縁部から体部片で、復元口径 29.2cm を測る。内外面にハケメが施され、外面にスガが付着する。

SK020 (第22・23図、図版5)

調査区の南西側で検出した。SK014、SD052 に近接する。歪な長楕円形を呈し、長軸 4.05m、短軸 1.4m、深さ 0.2m を測る。土師器、黒色土器、白磁が出土した。

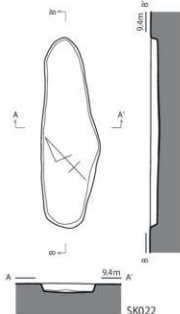
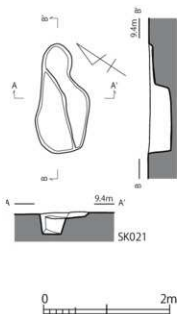
土師器 26 は小皿。底部片で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

黒色土器 27 は埵か。口縁部から体部片で、復元口径 14.6cm を測る。いわゆる内黒の黒色土器である。

白磁 28 は蓋。ほぼ完形の摘みをもつ蓋で、径 3.3cm、器高 1.3cm を測る。後述する SD051 出土の白磁小壺とセットになる可能性がある。

SK021 (第24図)

調査区の中央東寄りて検出した。やや歪な瓢形を呈し、長軸 1.75m、短軸 0.85m、深さ 0.35m を測る。



弥生土器、土師器が出土したが、小片のため図示できなかった。

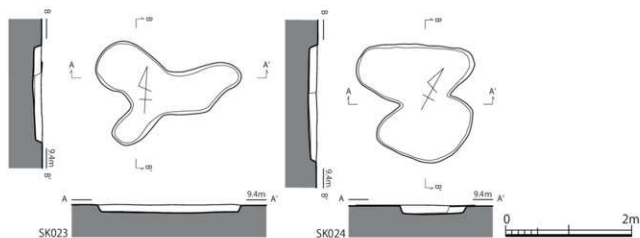
SK022 (第24図)

調査区の中央で検出した。SK023・024 が近接する。長楕円形を呈し、長軸 3.0m、短軸 0.95m、深さ 0.15m を測る。土師器、須恵器、瓦器、白磁などが出土したが、小片のため図示できなかった。

SK023 (第25・26図、図版5)

調査区の中央で検出した。SK022 に近接する。不整形で、長軸 2.3m、短軸 1.65m、深さ 0.15m を測る。出土遺物に土師器、須恵質土器、白磁、中国陶器があり、中国陶器を図

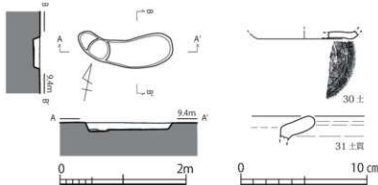
第24図 SK021・022 実測図 (1/60)



第25図 SK023・024 実測図 (1/60)



第26図 SK023 出土物実測図 (1/3)



第27図 SK025 実測図 (1/60) 第28図 SK025 出土物実測図 (1/3)
示した。

中国陶器 29は盤。小型品の口縁部片で、釉葉は暗褐色を呈す。
SK024 (第25図)

調査区の中央で検出した。SK022、SX084が近接する。やや歪な瓢型を呈し、長軸1.9m、短軸1.85m、深さ0.15mを測る。土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、白磁が出土したが、小片のため図示できなかった。

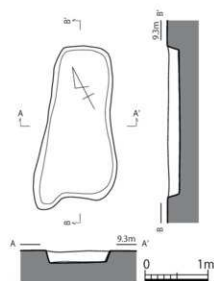
SK025 (第27・28図)

調査区の中央で検出した。やや歪んだ楕円形を呈し、長軸1.55m、短軸0.55、深さ0.15mを測る。出土遺物に土師器、土師質土器がある。

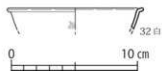
土師器 30は小皿。底部の小片である。

土師質土器 31は鍋。口縁部の小片で、外面にススが付着する。

SK026 (第29・30図、図版5)



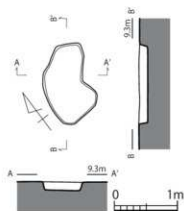
第29図 SK026 実測図 (1/60)



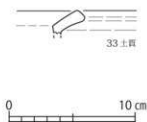
第30図 SK026 出土物実測図 (1/3)

調査区の中央東寄りで検出した。SK027、SD064が近接する。やや歪な長方形を呈し、長辺2.6m、短辺1.2m、深さ0.2mを測る。土師器、瓦器、須恵質土器、白磁、青磁などが出土し、白磁を図示した

白磁 32は碗。口縁部から体部片で、復元口径13.8cmを測る。口縁端部を嚙状に折り曲げて仕上げる。



第31図 SK027実測図 (1/60)



第32図 SK027出土遺物実測図 (1/3)

SK027 (第31・32図)

調査区の中央東寄りで検出した。SK026、SD063が近接する。やや歪な楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.15mを測る。土師器、瓦器、土師質土器、炭が出土し、土師質土器を図示した。

土師質土器 33は銅。口縁部

の小平片である。

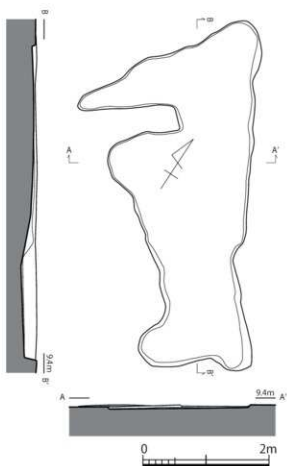
SK028 (第33・34図、図版5)

調査区の東寄りで検出した。SD058に接する。不整形で、長軸5.55m、短軸2.8m、深さ0.2mを測る。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶器、白磁などがあり、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器を図示した。

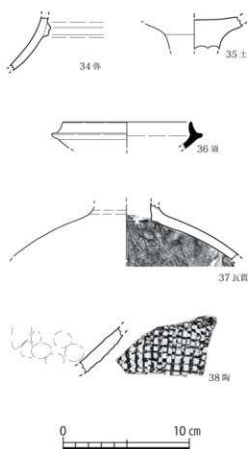
弥生土器 34は壺。胴下半の破片で、上位にM字突帯を1条めぐらす。

土師器 35は高環。環部底面から脚部上端の破片である。

須恵器 36は環身。口縁部から環部片で、復元口径10.3cmを測る。



第33図 SK028実測図 (1/60)



第34図 SK028出土遺物実測図 (1/3)

瓦質土器 37は壺。頸部から肩部片で、内面にはケズリの痕跡を残す。

陶器 38は甕。国産の無軸陶器で、外面に格子目タタキを施す。産地不明。

SK029 (第35図)

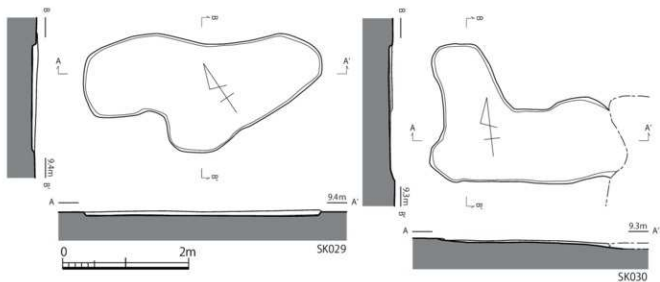
調査区の北東寄りで検出した。不整形形で、長軸3.8m、短軸1.9m、深さ0.1mを測る。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK030 (第35図)

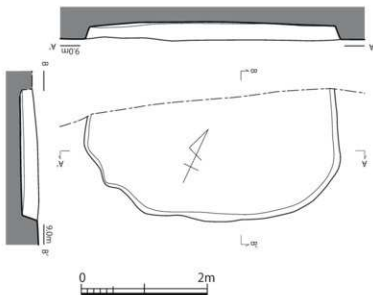
調査区の北東端で検出した。L字形を呈し、東側は調査区のきわに接している。長軸3.15m、短軸2.2m、深さ0.05mを測る。土師器が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK031 (第36・37図、図版5)

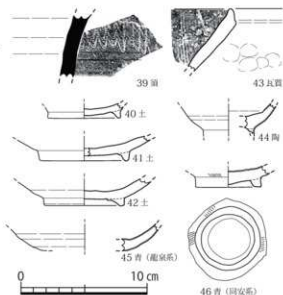
調査区の中央北端で検出した。北側は調査区外へと広がっている。検出できた範囲で、長軸4.05m、短軸1.95m、深さ0.3mを測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶器、白磁、青磁、炭などが出土したが、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、青磁を図示した。



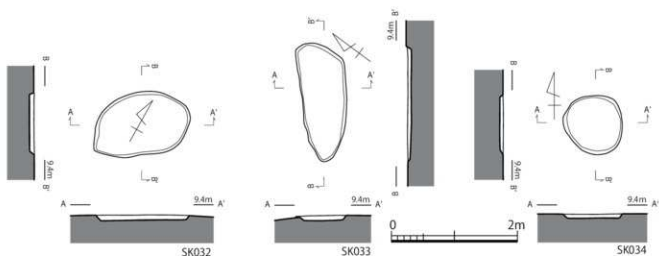
第35図 SK 029・030 実測図 (1/60)



第36図 SK031 実測図 (1/60)



第37図 SK031 出土遺物実測図 (1/3)



第38図 SK032～034 実測図 (1/60)

土師器 40～42は埴。いずれも底部から高台部の破片である。

須恵器 39は大甕か。頸部片で、外面に櫛描波状文を施す。自然釉が付着する。

瓦質土器 43は鉢。口縁部から体部片で、内面に4条1組の栞目を施す。

陶器 44は埴。体部から高台部片で、釉薬は黄褐色を呈す。見込みは釉を掻き取る。古瀬戸か。

青磁 45・46は碗。45は体部片。龍泉窯系で内外面に装飾をもたない。46は底部から高台部の破片。

同安窯系で、外面にわずかに櫛描文を残す。

SK032 (第38図)

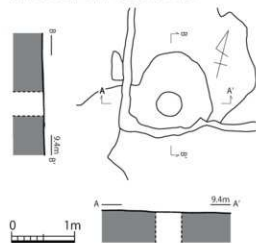
調査区の北西側で検出した。楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.0m、深さ0.1mを測る。土師器、瓦器が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK033 (第38図)

調査区の北西側で検出した。長楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。土師器、陶器、白磁が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK034 (第38図)

調査区の北西側で検出した。円形を呈し、径0.95m、深さ0.1mを測る。出土遺物に土師器があるが、小片のため、図示できなかった。

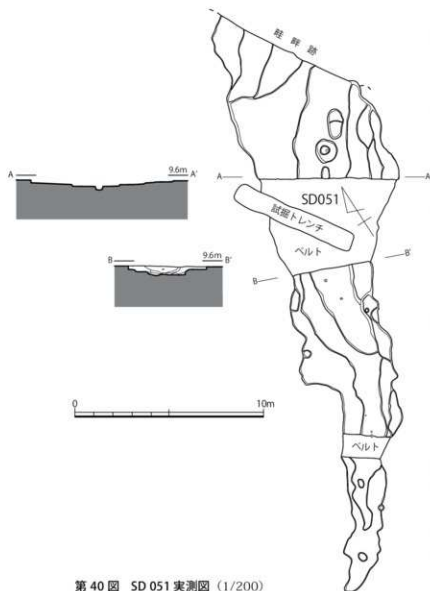


第39図 SE041 実測図 (1/60)

(3) 井戸

SE041 (第39図、図版3)

調査区の中央やや北西寄りで検出した。円形を呈し、径0.4m、深さは湧水のため分からなかった。通常は曲物を組んだり木を削り貫いて井筒とするが、こういった構造であったかは明確にできない。出土遺物は無かった。



第40図 SD051実測図 (1/200)

くの字口縁で、復元口径26.4cmを測る。52は口縁部から胴部上半の破片。くの字口縁だが、51より屈曲が緩い。53も口縁部から胴部上半の破片。端部は喇叭形に広がる形状となる。54は口縁部から胴部下半の破片で、底部を欠く。復元口径34.6cmを測る。口縁端部の形状は緩く外反させる。内面はヘラケズリ調整。55は口縁部片、56は胴部片である。64～87は平安時代後半から鎌倉時代の土師器。64は坏身。古墳時代の坏身の形状に似ており、あまり類例を知らない。口縁部から底部片で、復元口径5.2cm、器高3.2cmを測る。底部外面に回転糸切り痕を残す。65～73は小皿。72は回転ヘラ切りで、他は回転糸切りで仕上げる。底部外面に板状圧痕を残すものもある。74～81は坏。78・80は回転ヘラ切りで、他は回転糸切りで仕上げる。小皿と同様に板状圧痕を残すものもある。82～87は埴。82～86は体部から高台部片、87は底部から高台部片である。

須恵器 57は埴。口縁部から体部片。58は壺か。口縁部片で、口径4.0cmを測る。59～62は甕。59は口縁端部の破片。60は頸部から肩部片で、外面に平行タタキを施し、内面に青海波文当具痕を残す。61・62は胴部片。61は内面に同心円文当具痕、62は青海波文当具痕を残す。

緑釉陶器 63は埴か。口縁部の小片。土師質であるため、防長産と考えられる。

黒色土器 88・89は坏。いずれも復元口径15.0cmを測る。いわゆる内黒の黒色土器である。

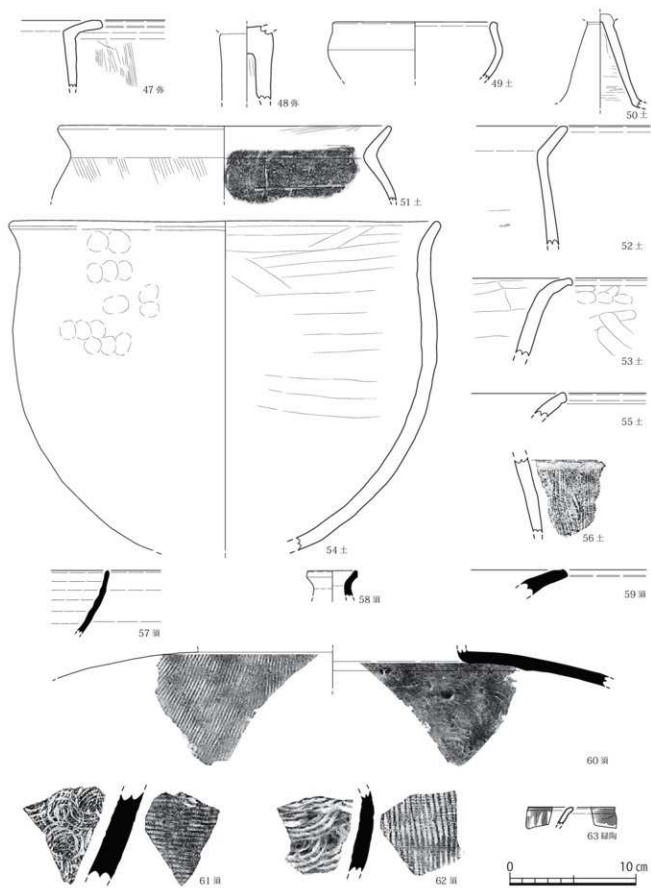
(4) 溝

SD051(第40～43図、図版4～6)

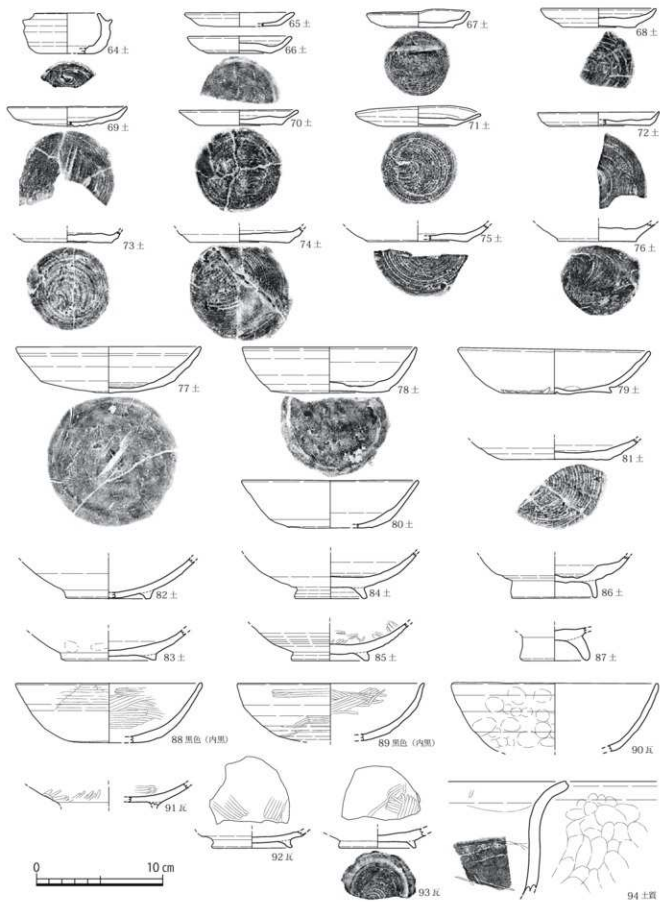
調査区の西側を南西から北東方向に伸びる。北東側は畦畔につつきり、その先は削平されている。北東側の底面にSKO11がある。現状で、長さ約31m、最大幅7.5m、深さ0.5mを測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁など、多くの遺物が出土した。

弥生土器 47は甕。口縁部から胴部の破片である。口縁部はΓ形を呈す。須玖式。48は高坏。坏部底面から脚部上端の破片である。脚部の残存部は筒状を呈す。

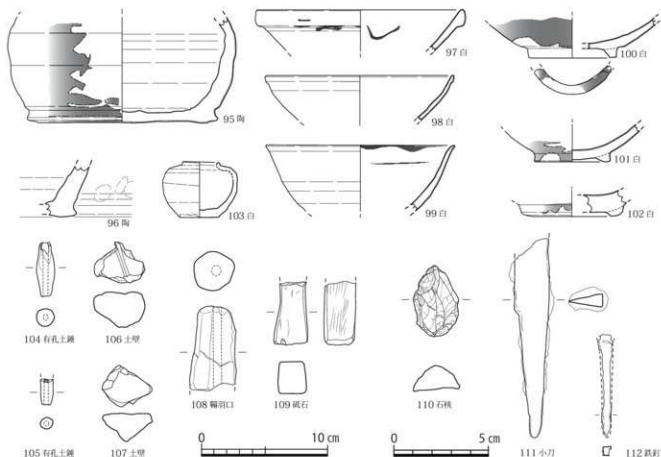
土師器 49～56は古墳時代から奈良時代前後の土師器。49は坏。口縁部から体部片で、復元口径12.6cmを測る。50は高坏。坏部底面から脚部下半の破片。脚部は裾部にかけて喇叭形に広がり、端部はさらに屈曲して広がる形状をとる。脚部内面にシボリやケズリの痕跡を残す。51～56は甕。51は口縁部から肩部片。



第 41 图 SD 051 出土遺物実測图 1 (1/3)



第 42 图 SD 051 出土遗物实测图 2 (1/3)



第43図 SD 051 出土遺物実測図3 (1/2・1/3)

瓦器 90～93は埴。いずれも破片資料で、全形をうかがえるものは無い。

土師質土器 94は鍋。口縁部から体部にかけての破片である。

陶器 95は壺。胴部から底部片で、復元底径15.3cmを測る。底部外面はヘラ切り後ナデで仕上げている。外面には自然釉がかかる。産地不明。96は甕。底部の小片である。備前焼と考えられる。

白磁 97～103は白磁。97～102は碗。97は口縁部から体部片で、復元口径16.8cmを測る。口縁端部は玉縁となる。98も口縁部から体部片で、復元口径15.2cmを測る。口縁端部は小さな玉縁となる。99は口縁部から体部片で、復元口径15.2cmを測る。口縁端部は外反する。100・101は体部から高台部片。100は畳付に目痕を残す。102は底部から高台部片。103は小壺。完形品で、口径2.9cm、底径3.6cm、器高4.5cmを測る。外面は胴部下位まで施釉する。底面は回転ヘラケズリで仕上げで露胎となる。

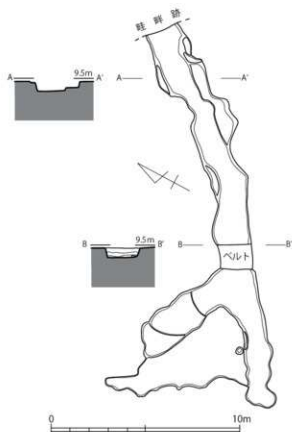
土製品 104・105は有孔土錘。いずれも欠損するが棒状を呈す有孔土錘で、漁網錘と考えられる。106・107は土壁。いずれもスサ入りの粘土塊である。108は鞆羽口。上端部の破片である。金属溶解物の付着は確認できない。

石製品 109は砥石。上部を欠く。幅は2.7cmで、4面の砥面を残す。細粒砂岩製。

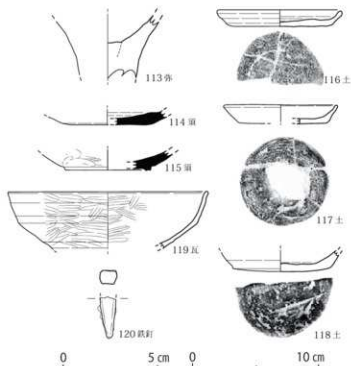
石器 110は石核か。長さ3.6cm、幅2.3cm、厚さ1.4cmを測る。全体的にローリングを受けている。石材は黒曜石。産地はよく分からないが、色調から姫島産ではないと考えられる。

鉄器 111は小刀。刃部から茎部にかけての破片で、刃部の上半と切先を欠く。残長10.6cmを測る。全体的に錆に覆われ、木質などの有機物は目視できない。また茎部の目釘も確認できない。

鉄製品 112は鉄釘。全体的に剥離が進み、状態は良くない。断面形は方形を呈す。



第44図 SD052 実測図 (1/200)



第45図 SD052 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

SD052 (第44・45図、図版4・6)

調査区の南端を南西から北東方向に伸びる。西側はV字状に広がる。一方東側は一部調査区のきわにぶつかり、調査区外へと広がる。SK019に切られている。現状で、長さ約30m、最大幅9.1m、深さ0.5mを測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、中国陶器など、多くの遺物が出土し、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、鉄釘を図示した。

弥生土器 113は甕。底部片であるが、底面を欠く。

土師器 116・117は小皿。いずれも底部は回転糸切りで仕上げる。116は底部外面に板状圧痕を残す。118は小坏。底部片で回転ヘラ切りで仕上げ、板状圧痕を残す。

須恵器 114は坏身。底部片で回転ヘラケズリで仕上げる。115は塊。底部から高台部の破片。

瓦器 119は塊か。口縁部から体部片。復元口径16.0cmを測る。

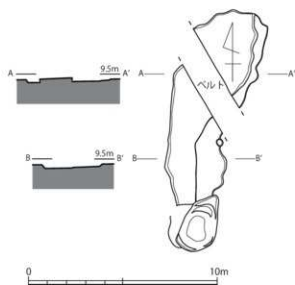
鉄製品 120は鉄釘。先端部の破片。断面形は方形である。

SD053 (第46・47図、図版6)

調査区の西側を南西から北東方向に伸びる。西側はSK012に切られている。長さ約11m、最大幅4m、深さ0.2mを測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、白磁、炭など、多くの遺物が出土した。そのうち弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器、瓦器、瓦質土器、白磁、土錘、砥石を図示した。

弥生土器 121は甕。底部の破片で、復元底径5.0cmを測る。断面で粘土の接合痕をうかがうことができる。

土師器 122は甕。口縁部から胴部上位の破片で、頸部から口縁部にかけて外反する。外面はタタキ



第46図 SD 053 実測図 (1/200)

を施す。135・136は小皿。いずれも2分の1程度を残し、底部は回転糸切りで仕上げる。底部外面に板状圧痕を残す。137は環。口縁部から底部片で、復元口径14.4cm、器高3.4cmを測る。138～142は塊。いずれも体部下位から高台部の破片である。

須恵器 123・124は蓋。いずれも天井部から口縁部の破片で、123は復元口径13.0cm、124は復元口径12.0cmを測る。123は宝珠形の摘みが付くと考えられる。124は123に比して器高が低いことから、扁平な摘みが付くと考えられる。いずれも口縁端部は下方に折り曲げ、嘴状に仕上げる。125は坯身。受部から底部片。底部は回転ヘラ切りで、回転ヘラケズリを施さない。126は塊。体部下位から高台部の破片である。127は器台か。器部の破片で、その外面

上位に1条の三角突帯をめぐらせる。128・129は甕ないし壺。128は口縁部から頸部の破片で、復元口径13.4cmを測る。頸部内面より下位に青海波文当具痕を残す。129は頸部から肩部片。外面にカキメを施し、頸部内面より下位に青海波文当具痕を残す。130～132は甕。130は頸部から肩部片、131は肩部片、132は胴部片である。いずれも外面に平行タキを施し、131と132は内面に青海波文当具痕を残す。

緑釉陶器 133は塊か。口縁部から体部にかけての破片で、復元口径14.8cmを測る。胎土が土師質であることから防長産と考えられる。

製塩土器 134は胴部の小片。内面に細かい布目痕を残し、外面はオサエによる指頭痕が明瞭に残る。

瓦器 143・144は塊。いずれも底部から高台部片で、144は高台内の底部外面に、ヘラ状工具による十字の施文が確認できる。

瓦質土器 145は鍋。口縁部から体部にかけての破片である。

白磁 146～148は碗。146は口縁部から体部片で、復元口径16.8cmを測る。口縁端部は玉縁である。147は口縁部から体部片で、復元口径16.2cmを測る。口縁端部は外反する。148も口縁部から体部片で、体部は内湾して丸みを帯び、口縁端部は直口縁となる。149は角環。口縁部から体部片で、平面形は八角形になると考えられる。

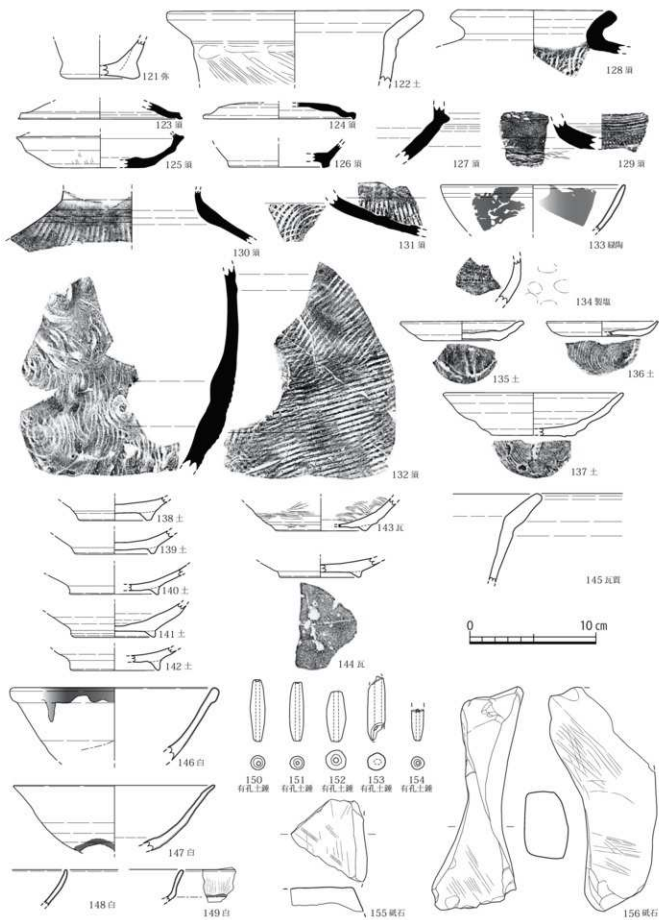
土製品 150～154は有孔土錘。いずれも棒状を呈し、漁網錘と考えられる。150～152は完形で、150は長さ4.9cm、幅1.1cm、151は長さ4.2cm、幅1.1cm、152は長さ4.0cm、幅1.6cmを測る。

石製品 155・156は砥石。155は砥面を2面残す破片である。石材は細粒砂岩。156は全体の4分の3程度を残し、おおよその全形をうかがえる。中央がくびれる角柱状を呈し、断面形は長方形である。残長17.9cm、幅6.7cmを測る。重量は約570gある。砥面は5面あり、置き砥として使用したものであろう。石材は細粒砂岩である。

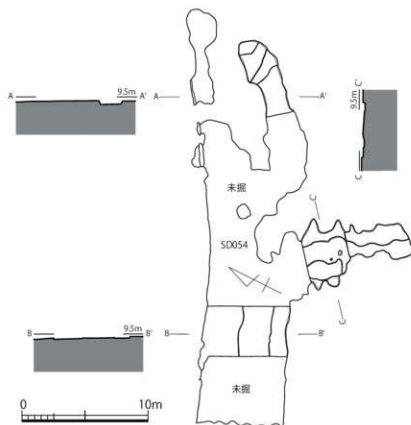
SD054 (第48・49図、図版6)

調査区の中央を南西から北東方向に伸び、東側は枝分かれる。長さ約32m、最大幅6.5m、深さ0.2mを測る。土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、白磁、青磁が出土した。

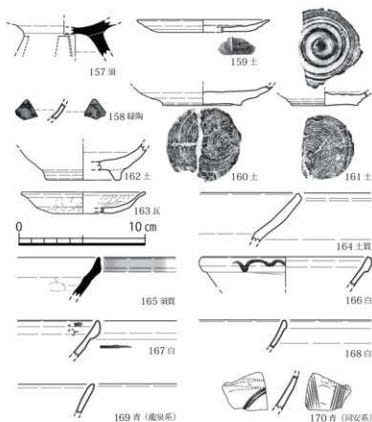
土師器 159は小皿。口縁部から底部片で、復元口径10.6cm、器高1.0を測る。160・161は環。い



第 47 图 SD 053 出土文物实测图 (1/3)



第48図 SD054 実測図 (1/300)



第49図 SD054 出土遺物実測図 (1/3)

ずれも底部片で、回転系切りで仕上げられる。板状圧痕はない。161は見込みに明瞭なロクロナデの痕跡を残す。162は碗。体部から高台部の破片である。

須恵器 157は高環。環部底面から脚部上位の破片。脚部には4方向に透孔を切り込む。

緑釉陶器 158は碗か。体部の小片である。須恵質であることから畿内産と考えられる。釉薬は深緑色で、黄緑色を呈す防長産とは異なる。

瓦器 163は小皿。口縁部から底部片で、復元口径9.9cm、器高1.7cmを測る。

土師質土器 164は銅か。口縁部片の破片である。

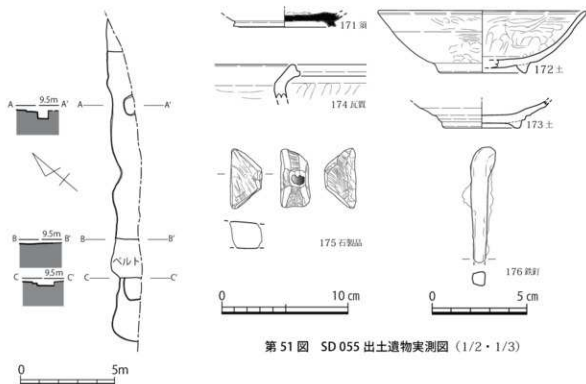
須恵質土器 165は鉢。口縁部から体部上位の破片で、口縁端部は玉縁状に肥厚させる。いわゆる東播系の捏鉢である。

白磁 166～168は碗。166・167は口縁部から体部片で、端部を玉縁とする。168も口縁部から体部の破片。口縁端部は小さな玉縁となる。

青磁 169・170は碗。169は口縁部片で、龍泉窯系で内外面に装飾をもたない。口縁端部は丸く直口する。170は体部片。同安窯系で、内面に櫛点描文、外面に櫛描文を施す。

SD055 (第50・51図、図版6)

調査区の南端を南西から北東方向に伸び、東側は調査区外へと続く。SD052と一連の遺構の可能性がある。検出できた範囲で、長さ約17m、最大幅1.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁などがあり、土師器、須恵器、瓦質土器、滑石



第 51 図 SD 055 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

第 50 図 SD 055 実測図 (1/200)

製品、鉄釘を图示した。

土師器 172・173は埴。172は4分の1程度を残す破片で、復元口径16.7cm、器高5.0cmを測る。173は底部から高台部片。

須恵器 171は埴。底部から高台部の破片である。

瓦質土器 174は壺か。口縁部から頸部の破片で、口縁端部は凹んでいる。

石製品 175は滑石製品。平面形が台形を呈すが、欠損品である。石鍋の再加工品か。

鉄製品 176は鉄釘。先端部を欠き、現状で長さ6.1cm、幅0.7cmを測る。全体的に錆に覆われているため形状は明瞭ではないが、頭部は肥厚する。断面形が方形になる角釘である。

SD056 (第52・53図、図版6)

調査区の南西端を南西から北東方向に伸びる。SD055の延長線上に接するようにあり、一連の遺構となる可能性がある。検出できた範囲で、長さ8.4m、最大幅1.8m、深さ0.2mを測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁などがあり、土師器、土師質土器、須恵質土器、白磁を图示した。

土師器 177は埴。底部片で、回転糸切りで仕上げる。

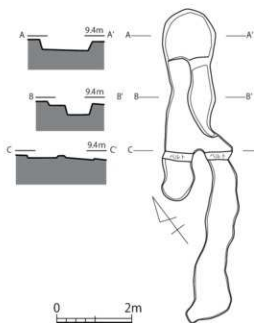
土師質土器 178は鍋。口縁部の小片である。

須恵質土器 179は鉢。底部片で、回転ヘラ切りする。いわゆる東播系の捏鉢である。

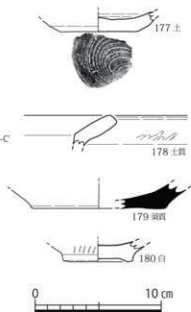
白磁 180は碗。底部から高台部の破片。外面にヘラケズリの痕跡を残す。

SD057 (第54・55図、図版6)

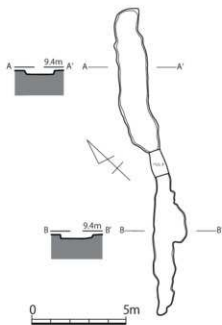
調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。後述のSD058と並行する。長さ約15m、最大幅1.8m、深さ0.2mを測る。出土遺物に土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、陶器、白磁などがあるが、白磁と土錘を图示した。



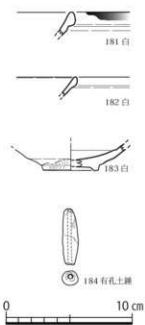
第52図 SD 056 実測図 (1/100)



第53図 SD 056 出土遺物実測図 (1/3)



第54図 SD 057 実測図 (1/200)



第55図 SD 057 出土遺物実測図 (1/3)

部から底部片。188・189は底部片。いずれも底部は回転糸切りで仕上げる。188は板状圧痕を残す。190～193は碗。190はほぼ完形で、口径16.7cm、器高6.0cmを測る。191は底部片で高台が剝離する。192・193は底部から高台部片。

瓦器 194・195は碗。いずれも底部から高台部の破片である。

白磁 196～199は碗。196は口縁部片。端部は玉縁となる。197は口縁部から体部片。口縁端部は屈折し、嘴状に尖る。内面には櫛目文を施す。198は体部から高台部片。外面に縦方向のヘラ描文を施す。

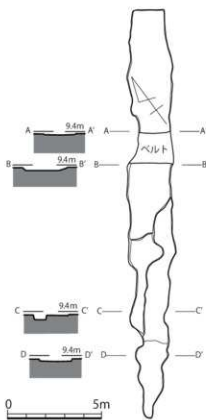
白磁 181は碗。口縁部片で、端部は肉厚な玉縁になる。182・183は皿。182は口縁部片。端部は玉縁である。183は体部から高台部の破片。

土製品 184は有孔土鍾。棒状を呈す。完形で、長さ4.5cm、幅1.25cmを測る。漁網錘である。

SD058 (第56・57図、図版7)

調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。前述のSD057と並行する。長さ約21.5m、最大幅2.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物に土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁、中国陶器などがあり、土師器、瓦器、白磁、青磁、中国陶器、土鍾を図示した。

土師器 185は小皿。全体の3分の2を残し、復元口径9.6cm、器高1.5cmを測る。底部は回転糸切りで仕上げ、板状圧痕を残す。186～189は坏。186は全体の4分の1程度を残し、復元口径14.4cm、器高3.0cmを測る。底部は回転糸切りか。187は体



第56図 SD 058 実測図 (1/200)

199は底部から高台部片。

青磁 200～201は碗。200は口縁部から体部片で、復元口径14.0cmを測る。龍泉窯系で、内面に雲文と柳描文を施す。201も口縁部から体部片。復元口径13.4cmを測る。

中国陶器 202は盤。口縁部の破片で、端部はT字形を呈す。

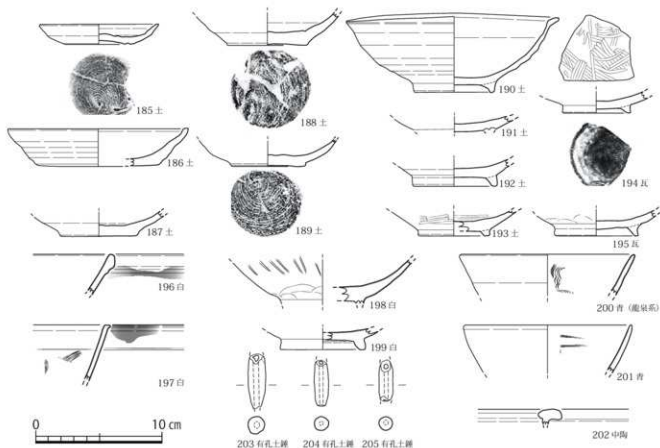
土製品 203～205は有孔土錘。棒状を呈し、漁網錘と考えられる。いずれも端部を欠損する。

SD059 (第58・59図、図版7)

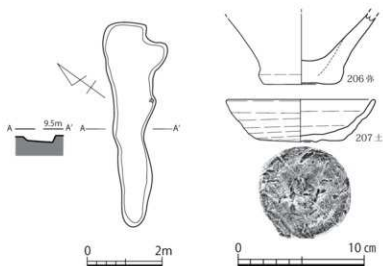
調査区の中央南寄りを西から東方向に伸びる。SD051と並行し、一連の遺構の可能性ある。長さ5.4m、最大幅1.7m、深さ0.2mを測る。出土遺物に弥生土器、土師器、瓦器、土師質土器があり、弥生土器と土師器を図示した。

弥生土器 206は壺。胴部下位から底部の破片である。甕の可能性もある。

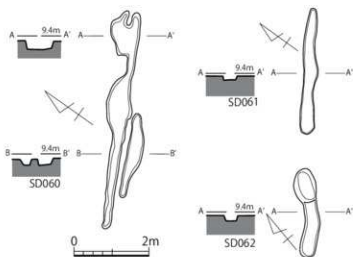
土師器 207は坏。ほぼ完形で、口径11.8cm、器高3.4cmを測る。底部は回転ヘラ切りする。板状圧痕を残す。



第57図 SD 058 出土遺物実測図 (1/3)



第58図 SD 059 実測図 (1/100) 第59図 SD 059 出土遺物実測図 (1/3)



第60図 SD 060～062 実測図 (1/100)

調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。SD057と近接することから、一連の遺構の可能性がある。長さ約7m、最大幅2.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、白磁、青磁などがあり、土師器、土師質土器、白磁を図示した。

土師器 208は埴。底部から高台部の破片。

土師質土器 209は鍋。口縁部の小片である。

白磁 210は碗。口縁部から体部片で、復元口径15.0cmを測る。口縁部は玉縁になる。211は皿。口縁部片で、復元口径8.4cmを測る。口縁部はやや肥厚した直口縁になる。

SD064 (第63・64図、図版7)

調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。西側をSX084に切られる。また延長線上にSD058があり、一連の遺構の可能性がある。現状で長さ6.5m、最大幅2.0m、深さ0.2mを測る。出土遺物は遺憾なことに整理過程でSX084の出土遺物と混ざってしまった。両遺構の出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁、中国陶器、炭などがあり、土師器、須恵器、瓦

SD060 (第60図)

調査区の西側を西から東方向に伸びる。SX081と並行し、一連の遺構の可能性ある。長さ5.8m、最大幅0.8m、深さ0.2mを測る。出土遺物に弥生土器、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器があるが、小片のため図示できなかった。

SD061 (第60図)

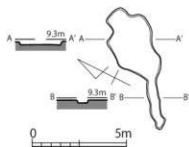
調査区の中央南寄りを南西から北東方向に伸びる。長さ3.3m、最大幅0.4m、深さ0.2mを測る。出土遺物に瓦器、青磁があるが、小片のため図示できなかった。

SD062 (第60図)

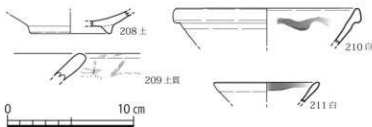
調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。SD062の延長線上にあることから、一連の遺構の可能性ある。長さ2.4m、最大幅0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物に土師器、瓦器、須恵質土器があるが、小片のため図示できなかった。

SD063 (第61・62図、図版7)

調査区の中央東寄りを南西から



第 61 図 SD 063 実測図 (1/200)



第 62 図 SD 063 出土遺物実測図 (1/3)

器、須恵質土器、白磁、土鍾を図示した。

土師器 213 は環。底部片で、回転糸切りで仕上げる。

須恵器 212 は壺。口縁部から頸部片で、口縁部は喇叭形に大きく広がる。

瓦器 214 は埴。底部から高台部の破片である。

須恵質土器 215 は鉢。口縁部片で、内面には強いナデの痕跡が残る。いわゆる東播系の捏鉢である。

白磁 216・217 は碗。216 は口縁部片で、端部は玉縁となる。217 は口縁部から体部の破片。端部は直口する。

土製品 218・219 は有孔土鍾。棒状を呈し、漁網鍾と考えられる。いずれも端部を欠く。

SD065 (第 65・66 図、図版 7)

調査区の北西側を南西から北東方向に伸びる。南に SX083 が接する。長さ 2.3m、最大幅 1.1m、深さ 0.1m を測る。出土遺物は土師器、須恵器、陶器があり、土師器を図示した。

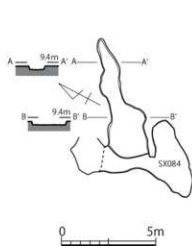
土師器 220 は埴。底部から高台部の破片である。

(5) 柵列

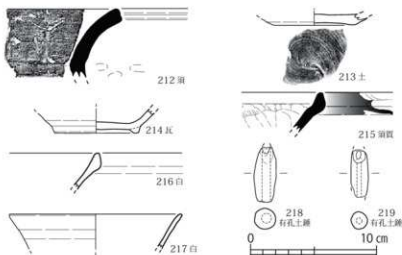
SA071 (第 67・68 図、図版 7)

調査区の西寄りにある。3つの柱穴からなる 2 間分を検出した。中央の柱穴は若干ずれるが、長さ 5.6m を測る。柱穴は径 30～50cm、深さ 15～30cm を測る。柱穴から土師器、瓦器、凹石が出土し、瓦器と凹石を図示した。

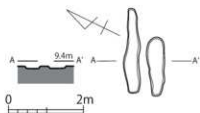
土師器 221～223 は埴。221 は体部から高台部片。内面にヘラミガキ痕を残す。222・223 は底部から高台部片。



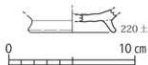
第 63 図 SD 064 実測図 (1/200)



第 64 図 SD 064・SX 084 出土遺物実測図 (1/3)



第 65 図 SD 065 実測図 (1/100)



第 66 図 SD 065 出土遺物実測図 (1/3)

石器 224 は凹石。完形で扁平な楕円形を呈す。長さ 9.9cm、幅 7.8cm、厚さ 3.6cm で、重さは約 320g を量る。一方の面の中央が敲打され、凹んでいる。河原石を利用したものと思われるが、石材は分からない。

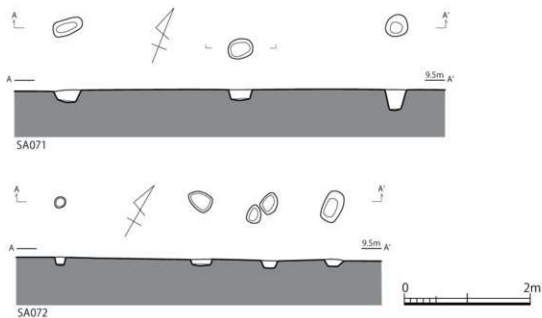
SA072 (第 67 図)

調査区の南西寄りにある。SD051 の西側に接するようにある。4 つの柱穴からなる 3 間分を検出し、長さ 4.55m を測る。柱穴は径 15 ~ 50cm、深さ 10 ~ 15cm を測る。柱穴から陶器が出土したが、小片のため図示できなかった。

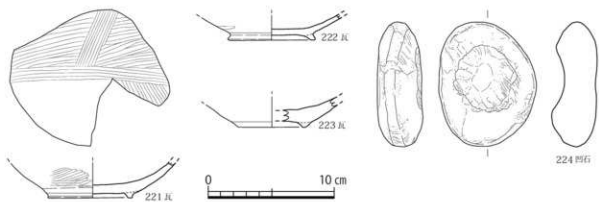
(6) 不明遺構

SX081 (第 69・70 図、図版 7)

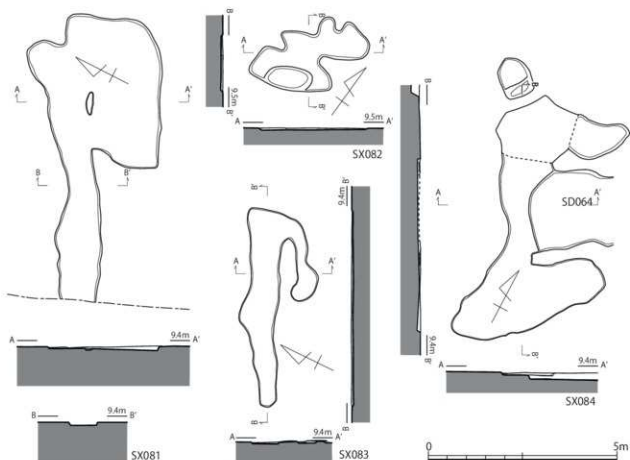
調査区の西端にあり、西側は調査区外へと続いている。SD060 が南西側に接する。平面形は歪な Γ 形を呈し、現状で



第 67 図 SA 071・072 実測図 (1/60)



第 68 図 SA 071 出土遺物実測図 (1/3)



第 69 図 SX081～084 実測図 (1/100)



第 70 図 SX081 出土遺物実測図 (1/3)

長さ 7.6m、最大幅 3.5m、深さ 0.1m を測る。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、須恵質土器があり、土師質土器と須恵質土器を図示した。

土師質土器 225 は鍋。口縁部の小片である。

須恵質土器 226 は瓶か。胴部下位から底部の破片で、底部は回転ヘラケズリで仕上げる。産地は不明である。

SX082 (第 69 図)

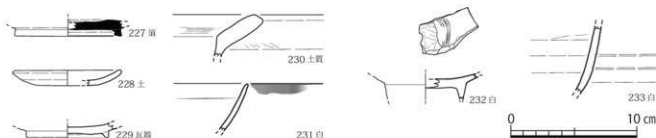
調査区の中央南寄りにある。平面形は歪な N 形を呈し、現状で長さ 3.0m、最大幅 1.9m、深さ 0.1m を測る。出土遺物に土師器、瓦器があるが、小片のため図示できなかった。

SX083 (第 69 図)

調査区の中央西寄りにあり、SD065 と接する。平面形は歪な Γ 形を呈し、長さ 5.3m、最大幅 1.8m、深さ 0.1m を測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器があるが、小片のため図示できなかった。

SX084 (第 64・69 図、図版 7)

調査区の中央やや東寄りにあり、SD064 を切る。平面形は Σ 形を呈し、長軸 6.7m、短軸 4.1m、深さ 0.1m を測る。出土遺物は先述したように SD064 と混ざってしまっている。両遺構の出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁、中国陶器、炭などがあり、図化できる



第71図 SP出土遺物実測図(1/3)

もの第69図で示した。

(7) 柱穴(第7・71図、図版7)

調査では複数の柱穴を検出し、土師器、須恵器、瓦器、白磁、青磁など、少量ではあるが多様な遺物が出土した。以下では図化できたものを報告する。

土師器 228 は小皿。口縁部から底部片で、復元口径8.6cm、器高1.2cm。底部は回転糸切りで仕上げる。SP131出土。

須恵器 227 は碗。底部から高台部の破片。SP134出土。

瓦器 229 は碗。底部から高台部の破片。SP106出土。

土師質土器 230 は鍋。口縁部の小片である。SP112出土。

白磁 231・232 は碗。231は口縁部から体部片。口縁端部は直口である。SP118出土。232は底部から高台部の破片。見込に櫛描文を施す。高台は高く、直立するものである。SP106出土。233は壺。胴部の破片で、内外面にロクロナデの痕跡を残す。SP128出土。

(8) 表土(第72・73図、図版8)

以下では、遺構検出時の表土剥ぎの際に見つかった遺物を報告する。表面採集品も含むものと考えられる。

弥生土器 234は壺。頸部片で、付け根に1条の三角突帯をめぐらす。

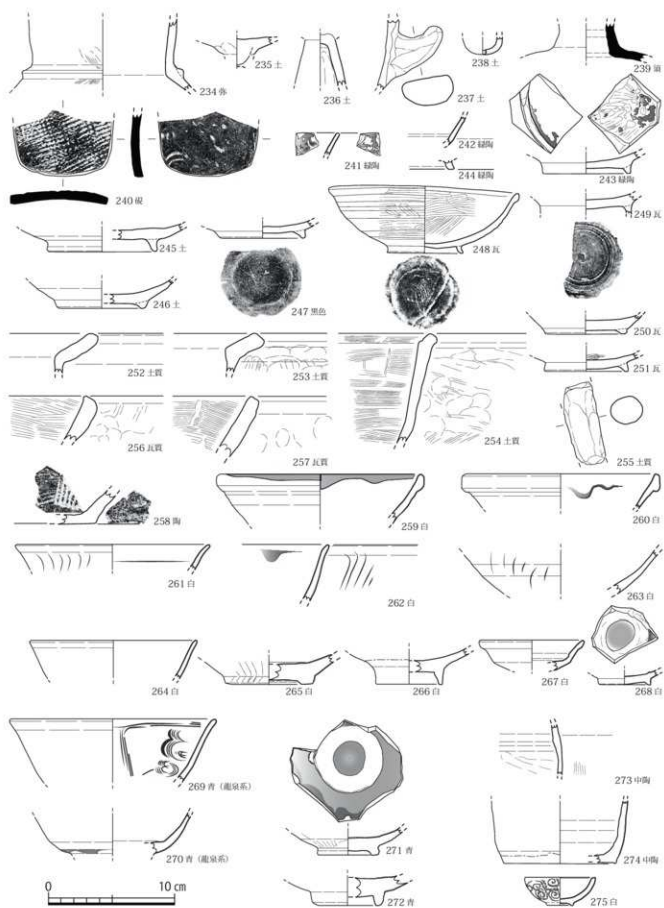
土師器 235～238は古墳時代から奈良時代前後の土師器。235・236は高坏。235は坏部底面の破片。脚部との接合面で剥離する。236は脚部上半の破片。内面にオサエの指頭痕を残す。237は甗か。把手の破片である。238は手捏のミニチュア土器。口縁部を欠く。245・246は平安時代後半から鎌倉時代の土師器。いずれも碗で、底部から高台部の破片。

須恵器 239は壺ないし瓶類。頸部の破片である。240は硯。甕を再加工した猿面硯で、市内では初例となる。上部を欠き、現状で長さ5.4cm、幅8.0cm、厚さ0.7cmを測る。海となる内面には青海波文当具痕が残るが、墨を擦ったことで全体的に磨滅している。また墨痕も明瞭に確認できる。外面は格子目文タタキの痕跡を残す。

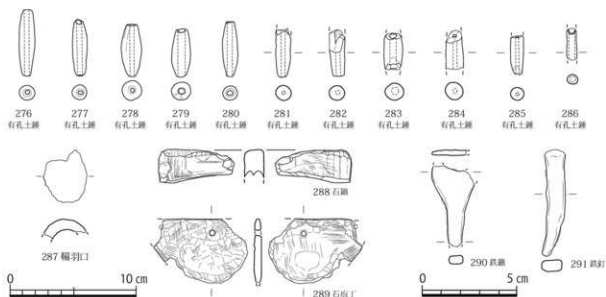
緑釉陶器 241～244は碗。241は口縁部片。土師質であることから防長産と推定できる。242は体部下半の破片。やはり土師質で、防長産と考えられる。243は底部から高台部の破片。胎土は土師質で全体的に釉薬は剥離する。防長産。244は高台部の小片で、接合面で剥離したものである。胎土は須恵質で、近江産と考えられる。釉薬はやや濃い緑色を呈す。

黒色土器 247は碗。底部から高台部の破片で、いわゆる内黒の黒色土器である。

瓦器 248～251は碗。248はほぼ完形で、口径15.2cm、器高5.4cmを測る。249～251は底部から高台部の破片である。



第72図 表土 出土遺物実測図1 (1/3)



第73図 表土 出土遺物実測図2 (1/2・1/3)

土師質土器 252～255は鍋。252・253は口縁部片である。254は口縁部から体部の破片で、内面はヨコハケ、外面にはオサエによる指頭痕を残す。255はいわゆる足鍋の脚部片である。

瓦質土器 256・257は鉢。いずれも口縁部片で、内面にヨコハケ、ナナメハケを施す。

陶器 258は播鉢。底部片で、内面に櫛状工具で播目を施す。備前産か。

白磁 259～266は碗。259は口縁部から体部片で、復元口径16.6cmを測る。口縁端部を玉縁とする。260は口縁部片で、復元口径15.8cmを測る。口縁端部は259と同様の玉縁である。261は口縁部片で、復元口径15.0cmを測る。外面にヘラ状工具で花卉文を施す。262は口縁部から体部、263は体部片で、外面に261と同様の花卉文をもつ。264は口縁部から体部片。復元口径13.4cmを測る。口縁端部を直口とする。265は底部から高台部の破片。外面にヘラケズリ痕を残す。口縁部が玉縁となるものに一般的。な高台部のつくりである。266も底部から高台部片。高台は高く直立するものである。267・268は皿。267は口縁部から体部片で、復元口径8.4cmを測る。口縁端部は玉縁となる。268は底部から高台部の破片。見込の軸葉を輪状に挿き取る。275は紅皿。近世の肥前陶磁で、型成形を行う。外面は唐草文である。

青磁 269～272は碗。269は口縁部から体部片で、復元口径16.6cmを測る。龍泉窯系で、内面はヘラ状工具で分割して飛雲文を施す。270は体部から底部片。龍泉窯系で、内外面とも無文である。271は体部から高台部片。見込の軸葉を輪状に挿き取る。272は底部から高台部片。底部は肉厚で、見込の軸葉をすべて挿き取る。

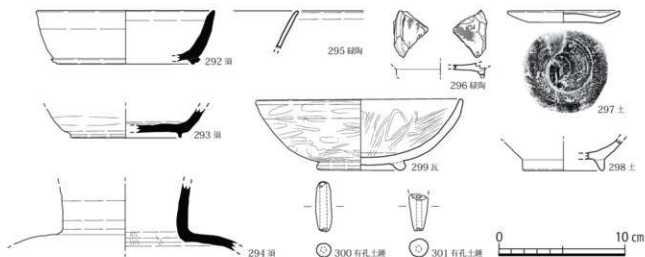
中国陶器 273は水柱あるいは耳壺と考えられる。胴部幅で、軸葉は黒褐色を呈す。274は壺。胴部下位から底部の破片である。軸葉は灰黄色を呈す。

土製品 276～286は有孔土錘。いずれも棒状を呈し、漁網錘と考えられる。276～280は完形ないしほぼ完形で、276は長さ5.2cm、幅1.3cm、277は長さ4.5cm、幅1.2cm、278は長さ4.2cm、幅1.6cm、279は長さ3.8cm、幅1.5cm、280は長さ4.4cm、幅1.25cmをそれぞれ測る。287は輪羽口。小片であるが、先端に近い破片と思われる。

石製品 288は石鍋。滑石製で、外面にススが附着する。

石器 289は石庖丁。直背外湾刃型の破片である。2孔を穿つ。石材は頁岩質砂岩か。

鉄器 290は鉄鍬。刃部先端と茎基部を欠く、雁股形の破片である。現状で長さ4.3cmを測る。刃部は



第74図 包含層トレンチ出土遺物実測図(1/3)

薄い。木質などの有機物は確認できない。

鉄製品 291は鉄釘。ほぼ完形で、長さ5.6cm、幅1.0cmを測る。錆に覆われ頭部はあまり明確でない。断面形が方形の角釘である。

(9) 包含層トレンチ(第7・74図、図版8)

ラベルに「包含層トレンチ南」とあり、平板測量図から調査区の西端に設定された、一辺9mの正方形トレンチから出土した遺物であることが分かる。

土師器 297は小皿。全体の3分の2程度を残し、復元口径8.9cm、器高0.9cmを測る。底部は回転糸切りで仕上げる。298は埴。底部から高台部の破片である。

須恵器 292・293は埴。292は口縁部から高台部の破片で、口径14.4cm、器高4.3cmを測る。293は体部から高台部片。294は壺。頸部から肩部の破片である。

緑釉陶器 295・296は埴。295は口縁部から体部片である。須恵質であることから、畿内産と考えられる。296は底部から高台部の破片。土師質で、黄緑色の釉薬が薄くかかる。防長産。

瓦器 299は埴。ほぼ完形で、口径16.5cm、器高5.7cmを測る。

土製品 300・301は有孔土錘。いずれも棒状を呈し、漁網錘と考えられる。300は完形で、長さ4.0cm、幅1.25cmを測る。

発掘番号	地上遺構	種別	部類	法量(m)	調査	状況	粘土	色調	堆存	備考
44	3001	陶磁	甕	高さ2.5	内: コロコナテ 外: コロコナテ-黒胎	良好	黒胎	赤褐色: 高さ3.1 6.3 胎: オリーブ色 5.4	底面→ 高台部分	古瀬戸式
45	3002	青磁	甕	高さ2.1	内: コロコナテ-黒胎 外: コロコナテ-黒胎	良好	～1mmの白色砂粒	赤褐色: 高さ3.1 6.2 胎: 赤褐色 2.1 5.1	底面片	段取部 (1-3a)
46	3003	青磁	甕	高さ1.2, 高さ2.1	内: コロコナテ-黒胎 外: コロコナテ-黒胎	良好	～1mmの白色砂粒	赤褐色: 高さ1.2 7.1 胎: 灰オリーブ色 6.4	底面→ 高台部分	古瀬戸式
47	3005	衛生土器	甕	高さ5.4	内: コロコナテ 外: コロコナテ-黒胎	良好	～1mmの砂粒	内: 黄 2.0 6.3 外: 白 2.1 6.3 5.3	口縁部片	古瀬戸式
48	3005	衛生土器	高坪	高さ5.9	内: コロコナテ-黒胎 外: コロコナテ	良好	～2mmの粗砂粒	内: 白 2.1 高坪部 6.2	断面片	○
49	3005	土師器	甕	高さ1口径12.6, 高さ4.8	内: 陶製ナテ 外: 陶製ナテ-ハナテ	良好	～3.5mmの白色砂粒	内: 黄 6.1 3.2 外: 赤褐色 6.1 5.1 赤胎 6.6	口縁部→ 高台部分	○
50	3005	土師器	高坪	高さ7.5	内: 陶製ナテ-ハナテ, ナテ 外: 陶製ナテ	良好	～4.7mmの白色砂粒	内: 赤褐色 2.1 6.3 5.9	断面→ 高台部分	○
51	3005	土師器	甕	高さ1口径16.4, 高さ6.9	内: 陶製ナテ-ハナテ, ハナテ 外: 陶製ナテ-ハナテ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 赤褐色 6.2 6.3 外: 赤褐色 6.2 5.3 赤胎 6.6	口縁部→ 高台部分	○
52	3005	土師器	甕	高さ6.5	内: 陶製ナテ-ハナテ 外: 陶製ナテ	良好	断面	内: 白 2.1 赤褐色 6.1 7.1 外: 白 2.1 赤褐色 6.1 7.2	口縁部→ 高台部分	○
53	3005	土師器	甕	高さ6.2	内: 陶製ナテ-ハナテ 外: 陶製ナテ	良好	～1mmの砂粒	内: 白 2.1 赤褐色 6.1 7.1 外: 白 2.1 赤褐色 6.1 7.2	口縁部→ 高台部分	○
54	3005	土師器	甕	高さ1口径34.6, 高さ26.5	内: 陶製ナテ-ハナテ 外: 陶製ナテ-ハナテ	良好	～1mmの砂粒	内: 赤褐色 6.2 6.3 外: 赤褐色 6.2 5.3	口縁部→ 高台部分	○
55	3005	土師器	甕	高さ1.9	内: 陶製ナテ 外: 陶製ナテ	良好	～4mmの砂粒	内: 白 2.1 赤褐色 2.1 7.1	口縁部片	○
56	3005	土師器	甕	高さ6.9	内: 陶製ナテ 外: 陶製ナテ-ハナテ	良好	～1mmの砂粒	内: 白 2.1 赤褐色 6.1 5.3 外: 黄 2.1 6.6	断面片	○
57	3005	赤胎甕	小	高さ5.1	内: 陶製ナテ 外: 陶製ナテ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 灰 2.1 6.1	口縁部→ 高台部分	○
58	3005	赤胎甕	小	口径4.5, 高さ2.6	内: 陶製ナテ 外: 陶製ナテ	良好	断面	内: 灰白 2.1 7.1 外: 灰 6.1	口縁部片	○
59	3005	赤胎甕	小	高さ2.8	内: 陶製ナテ 外: 陶製ナテ	良好	～2mmの砂粒	内: 黄 2.1 6.1 外: 灰 6.1	口縁部片	自然剥落
60	3005	赤胎甕	大甕	高さ2.2	内: コロコナテ(赤褐色文高台)ナテ 外: コロコナテ-白ナテ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 灰 6.1 7.1 外: 赤 2.1 6.1	断面→ 高台部分	○
61	3005	赤胎甕	大甕	高さ6.9	内: 陶製ナテ(赤褐色文高台) 外: 陶製ナテ-白ナテ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 灰 5.1 7.1 外: 灰 5.1 7.1	断面片	○
62	3005	赤胎甕	大甕	高さ6.5	内: 陶製ナテ(赤褐色文高台) 外: 陶製ナテ-白ナテ	良好	断面	内: 灰 6.1 7.1 外: 灰 6.1 7.1	断面片	○
63	3005	緑釉陶器	甕	高さ1.4	内: 陶製ナテ-黒胎 外: 陶製ナテ-黒胎	良好	～1mmの砂粒	赤褐色: 高さ1.4 6.1 胎: 赤褐色 1.4 6.1 7.1 外: 白 2.1 赤褐色 2.1 7.1	口縁部片	古瀬戸式
64	3005	土師器	塚倉	高さ1口径5.2, 高さ口径4.4, 高さ3.2	内: コロコナテ 外: コロコナテ-黒胎	良好	～2mmの白色砂粒	赤褐色: 高さ1.4 6.1 胎: 赤褐色 1.4 6.1 7.1 外: 白 2.1 赤褐色 2.1 7.1	口縁部片	○
65	3005	土師器	小甕	高さ1口径6.6, 高さ1.1	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	中々良好	～1mmの白色砂粒	内: 灰 6.1 6.2 外: 赤褐色 6.1 6.1	口縁部	○
66	3005	土師器	小甕	高さ1口径5.6, 高さ1.9	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	中々良好	～4mmの白色砂粒	内: 灰 2.1 6.3	口縁部	○
67	3005	土師器	小甕	口径6.1, 高さ5.6, 高さ13.6	内: コロコナテ-陶製高台 外: コロコナテ-陶製高台(緑胎)	良好	～1mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.1 外: 赤褐色 2.1 6.1	口縁部片	○
68	3005	土師器	小甕	高さ1口径5.8, 高さ1.5	内: 陶製ナテ 外: 陶製ナテ-陶製高台(緑胎)	中々良好	～2mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 7.1	口縁部	○
69	3005	土師器	小甕	口径6.6, 高さ1口径6.0, 高さ1.6	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台(緑胎)	良好	～2mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3	口縁部	○
70	3005	土師器	小甕	口径9.5, 高さ6.6, 高さ1.2	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	良好	～1mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3	口縁部	○
71	3005	土師器	小甕	口径16.1, 高さ6.9, 高さ1.5	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	中々不良	～2mmの白色砂粒	内: 白 2.1 高坪 7.1 6.4 外: 白 2.1 高坪 6.4	口縁部	○
72	3005	土師器	小甕	高さ1口径8.6, 高さ口径6.1, 高さ1.1	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	良好	～2.5mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.1 6.4 外: 白 2.1 高坪 7.1 6.4	口縁部	○
73	3005	土師器	小甕	高さ7.6, 高さ6.9	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	中々良好	～1mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3	断面片	○
74	3005	土師器	甕	高さ6.6, 高さ1.1	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	良好	～1mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3 外: 白 2.1 高坪 2.1 6.3	断面片	○
75	3005	土師器	甕	高さ1口径6.6, 高さ1.1	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	良好	～2mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3 外: 黄 2.1 7.1	断面片	○
76	3005	土師器	甕	高さ6.3, 高さ1.4	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	中々良好	～1mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3 6.4 外: 赤褐色 2.1 6.4	断面片	○
77	3005	土師器	甕	口径14.6, 高さ10.6, 高さ3.7	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台(緑胎)	中々良好	～1mmの白色砂粒	内: 白 2.1 高坪 7.1 6.4 外: 白 2.1 高坪 7.1 6.4	口縁部片	○
78	3005	土師器	甕	高さ1口径14.6, 高さ3.6	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台(緑胎)	中々良好	～2mmの白色砂粒	内: 白 2.1 高坪 7.1 6.4 外: 白 2.1 高坪 7.1 6.4	口縁部片	○
79	3005	土師器	甕	口径15.1, 高さ3.6	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台(緑胎)	良好	～1mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3 外: 黄 2.1 7.1	口縁部片	○
80	3005	土師器	甕	高さ1口径14.6, 高さ2.9	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	良好	～2.5mmの白色砂粒	内: 白 2.1 高坪 7.1 外: 黄 2.1 6.3	口縁部	○
81	3005	土師器	甕	高さ1口径6.6, 高さ1.6	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	中々良好	～2mmの白色砂粒	内: 白 2.1 高坪 7.1 6.4 外: 黄 2.1 6.3	断面片	○
82	3005	土師器	甕	高さ1口径6.6, 高さ3.6	内: コロコナテ 外: コロコナテ-陶製高台	中々不良	～3mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.4 外: 黄 2.1 7.1	断面→ 高台部分	○
83	3005	土師器	甕	高さ1口径7.6, 高さ2.4	内: コロコナテ 外: コロコナテ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 白 2.1 高坪 7.1 7.2 外: 白 2.1 高坪 7.1 7.1	断面→ 高台部分	○
84	3005	土師器	甕	高さ6.6, 高さ3.7	内: コロコナテ 外: コロコナテ	中々良好	～3mmの白色砂粒	内: 黄 2.1 6.3 6.4 外: 白 2.1 高坪 7.1 7.1	断面→ 高台部分	○
85	3005	土師器	甕	高さ1口径6.9, 高さ2.9	内: コロコナテ 外: コロコナテ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 灰白 2.1 6.1 外: 赤褐色 6.1 6.1	断面→ 高台部分	○
86	3005	土師器	甕	高さ1口径6.7, 高さ3.3	内: コロコナテ 外: コロコナテ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 灰 6.1 6.1 6.2 外: 白 2.1 高坪 7.1 7.1	断面→ 高台部分	○

表2 出土遺物観察表2

調査 番号	出土 遺物	種別	器種	数量 (㎡)	調査 箇所	状況	取 上	出 土 数	出 土 品	出 土 品	備 考
87	5001	土器類	埴	甕穴高台礎 3.2、甕高 2.6	内：コソコナテ 外：コソコナテ	今中良好	→1㎜の白色砂粒	内：灰白土 3.0 ㎡	甕高→ 甕穴高片		
88	5001	灰色土器	埴	甕穴口径 15.6、底径 7.1、甕高 4.4	内：コソコナテ→ヘラミナテ 外：コソコナテ→ヘラミナテ	良好	→1㎜の砂粒	内：焼灰 30.0 ㎡ 外：土白→焼灰 10.0 ㎡	1/3程度		内黒
89	5001	灰色土器	埴	甕穴口径 15.9、甕高 4.4	内：コソコナテ→ヘラミナテ 外：コソコナテ→ヘラミナテ	良好	→1㎜の砂粒少量	内：焼灰 30.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度→ 1/5程度		内黒
90	5001	瓦器	埴	甕穴口径 16.6、甕高 3.5	内：コソコナテ→オオサ 外：コソコナテ→オオサ	良好	→1㎜の砂粒	内：焼灰 30.0 ㎡	甕高→ 甕穴高片		
91	5001	瓦器	埴	甕高 3.5	内：コソコナテ→ヘラミナテ 外：コソコナテ→オオサ	良好	→2㎜の漂白白色砂粒	内：灰白土 30.0 ㎡	甕高→ 甕穴高片		
92	5001	瓦器	埴	甕穴高台礎 6.4、甕高 3.3	内：コソコナテ→ヘラミナテ 外：コソコナテ→オオサ	良好	細粒	内：底径 30.0 ㎡	甕高→ 甕穴高片		
93	5001	瓦器	埴	甕穴高台礎 6.2、甕高 2.9	内：コソコナテ→ヘラミナテ 外：コソコナテ→オオサ	良好	→1㎜の白色砂粒少量	内：底径 30.0 ㎡	甕高→ 甕穴高片		
94	5001	土製土 器類	罎	甕高 9.1	内：四脚ナテ→オオサ、 外：四脚ナテ→オオサ	今中良好	→3㎜の白色砂粒	内：底径 30.0 ㎡ 外：焼灰 30.0 ㎡ 外：土白→底径 10.0 ㎡	→甕高→ 甕穴高片		
95	5001	陶器	壺	甕穴高径 13.3、甕高 6.7	内：四脚ナテ→オオサ 外：四脚ナテ→オオサ	良好	→1㎜の砂粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	甕高→ 甕穴高片		自然耐久層
96	5001	陶器	壺	甕高 4.9	内：四脚ナテ 外：四脚ナテ→オオサ	良好	→1㎜の砂粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	甕高→ 甕穴高片		甕高？
97	5001	白磁	罎	甕穴口径 16.8、甕高 3.2	内：コソコナテ→胎 外：コソコナテ→胎	良好	→1㎜の砂粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度→ 甕穴高片		○ 胎
98	5001	白磁	罎	甕穴口径 17.5、甕高 3.6	内：コソコナテ→胎 外：コソコナテ→胎	良好	細粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度→ 甕穴高片		(胎) 胎
99	5001	白磁	罎	甕穴口径 17.5、甕高 3.5	内：コソコナテ→胎 外：コソコナテ→胎	良好	→1㎜の砂粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度→ 甕穴高片		○ 胎
100	5001	白磁	罎	甕穴高台礎 7.6、甕高 3.2	内：コソコナテ→胎 外：コソコナテ→胎	良好	→1㎜の砂粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度→ 甕穴高片		甕穴は白 磁片
101	5001	白磁	罎	甕穴高台礎 5.4、甕高 3.6	内：コソコナテ→胎 外：コソコナテ→胎	良好	→3㎜の砂粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度→ 甕穴高片		(胎) 胎
102	5001	白磁	罎	甕穴高台礎 8.2、甕高 3.8	内：コソコナテ→胎 外：コソコナテ→胎	良好	→1㎜の砂粒	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度→ 甕穴高片		
103	5001	白磁	小壺	口径 2.8、甕高 3.6、甕高 4.3	内：コソコナテ 外：コソコナテ→胎	良好	→1㎜の砂粒少量	甕高：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	胎片		○ 胎
104	5001	土製土 器類	有孔土器	甕高 4.3、幅 1.4	—	—	→1㎜の砂粒少量	甕高 3.0 ㎡	土製土器 片		○ 胎
105	5001	土製土 器類	有孔土器	甕高 2.4、幅 1.0	—	—	→1㎜の白色砂粒	底径 7.0 ㎡	胎片		○ 胎
106	5001	土製土 器類	土製	甕高 2.6、甕高 4.1	—	—	→3㎜の白色砂粒	底径 6.6 ㎡	胎片		○ 胎
107	5001	土製土 器類	土製	甕高 2.2、甕高 4.0	—	—	→1㎜の砂粒	底径 6.6 ㎡	胎片		○ 胎
108	5001	土製土 器類	輪切	甕高 6.7、幅 3.6	オオサ、ナテ	—	→1㎜の白色砂粒少量	甕高 3.0 ㎡	土製土器 片		○ 胎
109	5001	石製品	砥石	甕高 6.4、幅 2.7、重量 60.5kg	—	—	細粒砂	底径 2.0 ㎡	胎片		○ 胎
110	5001	石製品	石剣	長 3.6、幅 2.5、厚 1.4、重量 12.8kg	—	—	雲母片	底径 2.0 ㎡	胎片		○ 胎
111	5001	鉄器	小刀	甕高 16.6	鋼造	—	—	—	胎片→ 胎片		
112	5001	鉄器	鉄釘	甕高 5.3、幅 0.3	鋼造	—	—	—	胎片→ 胎片		○ 胎
113	5002	赤土土器	壺	甕高 2.9	内：コソコナテ 外：コソコナテ	良好	→1㎜の白色砂粒	内：土白→底径 10.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	胎片		
114	5002	赤土土器	埴	甕穴高径 6.2、甕高 0.6	内：四脚ナテ 外：四脚ナテ→胎	良好	→2㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡ 外：底径 3.0 ㎡	胎片		
115	5002	赤土土器	小壺	甕穴高径 6.8、甕高 1.2	内：コソコナテ→オオサ 外：コソコナテ→胎	不良	→1㎜の白色砂粒	内：灰白土 3.0 ㎡、焼灰 30.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/2程度		
117	5002	土器類	小壺	口径 9.6、底径 7.6、甕高 1.5	内：コソコナテ→胎 外：コソコナテ→胎	今中良好	→1㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡、土白→底径 10.0 ㎡	2/3程度		
118	5002	土器類	小壺	甕高 3.7	内：コソコナテ 外：コソコナテ→胎	今中不良	→2㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡ 外：土白→底径 10.0 ㎡	1/3程度		
119	5002	瓦器	埴	甕穴口径 16.6、甕高 4.3	内：コソコナテ→ヘラミナテ 外：コソコナテ→ヘラミナテ	良好	細粒	内：底径 3.0 ㎡ 外：土白→底径 10.0 ㎡	1/3程度		○ 胎
120	5002	鉄製品	鉄釘	甕高 2.3、幅 0.9	鋼造	—	—	—	胎片		○ 胎
121	5003	赤土土器	壺	甕穴高径 5.0、甕高 3.1	内：コソコナテ 外：コソコナテ	良好	→3㎜の白色砂粒	内：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	胎片		○ 胎
122	5003	土器類	壺	甕穴口径 20.6、甕高 5.2	内：四脚ナテ→オオサ 外：四脚ナテ→オオサ	良好	→3.5㎜の白色砂粒	内：土白→底径 10.0 ㎡、焼灰 30.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	1/3程度		○ 胎
123	5003	赤土土器	埴	甕穴口径 13.0、甕高 1.3	内：四脚ナテ 外：四脚ナテ→胎	良好	→2㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡	胎片		
124	5003	赤土土器	埴	甕穴口径 12.0、甕高 1.3	内：四脚ナテ 外：四脚ナテ→胎	良好	→3㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡	胎片		○ 胎
125	5003	赤土土器	埴	甕穴高径 2.3、甕高 2.7	内：四脚ナテ 外：四脚ナテ→胎	今中良好	→1.5㎜の白色砂粒	内：灰白土 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	胎片→ 胎片		
126	5003	赤土土器	埴	甕穴高台礎 8.6、甕高 1.9	内：四脚ナテ 外：四脚ナテ	良好	→2㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡	胎片		
127	5003	赤土土器	罎	甕高 4.1	内：四脚ナテ 外：四脚ナテ	良好	→4㎜の砂粒	内：底径 3.0 ㎡ 外：底径 2.0 ㎡	胎片		○ 自然耐久層
128	5003	赤土土器	壺→埴	甕穴口径 11.4、甕高 3.4	内：四脚ナテ→(青銅製文物片) 外：四脚ナテ	良好	→2㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡	胎片		○ 胎
129	5003	赤土土器	壺→埴	甕高 2.2	内：四脚ナテ→(青銅製文物片) 外：四脚ナテ→オオサ	良好	→1㎜の白色砂粒	内：底径 3.0 ㎡ 外：底径 3.0 ㎡	胎片		

表3 出土遺物観察表3

発掘番号	出土遺構	種類	部材	法 量 (cm)	測 量	状況	土 土	表 層	残 存 等 況	備考
130	5005	礎石部	巻	枕高 4.0	内: ココナツ(1号基礎)→ナツ 外: ココナツ→ナツ(多量)	中々良	~2mmの白色砂粒	内: 比高+埋深 100 7.2 外: 比高+埋深 100 6.3	埋没→ 露出部	○
131	5005	礎石部	巻	枕高 3.3	内: 埋込ナツ(1号基礎) 外: 埋込ナツ(1号基礎)	良好	~1mmの砂粒	内: 埋込 8.0 外: 埋込 8.0、埋込 2.0 6.2	露出部	
132	5005	礎石部	巻	枕高 16.4	内: 埋込ナツ(1号基礎) 外: 埋込ナツ(1号基礎)	良好	~1mmの白色砂粒	内: 埋込 8.0 外: 埋込 8.0	露出部	○
133	5005	礎石部	巻	枕高 14.8、枕高 3.7	内: 埋込ナツ(1号基礎) 外: ココナツ→埋込	良好	埋込	表層: 比高埋深 100 6.2 枕: 埋込 7.0	比高埋没→ 露出部	○ 図表添
134	5005	制振土部		枕高 3.6	内: ナツ(1号基礎) 外: ナツ→ナツ	良好	~1mmの白色砂粒少量	内: 比高+埋深 100 6.3 外: 埋込 7.0	露出部	
135	5005	土留部	小根	根元径 18.0、根高 3.5	内: ココナツ 外: ココナツ→埋込(埋込部)	中々良	~2mmの白色砂粒	内: 比高+埋深 100 7.0 外: 比高+埋深 100 5.4	1/4程度	
136	5005	土留部	小根	根元径 8.0、根高 1.2	内: ココナツ 外: ココナツ→埋込(埋込部)	中々良	~1mmの白色砂粒	内: 埋込 7.0、埋込 6.0 6.9 外: 埋込 7.0	1/2程度	○
137	5005	土留部	柱	根元径 14.4、根高 3.4	内: ココナツ→ナツ 外: ココナツ→埋込(埋込部)	不良	~3mmの白色砂粒	内: 比高+埋深 100 7.0 外: 比高+埋深 100 5.4	1/4程度	○
138	5005	土留部	塊	根元径 5.0、枕高 3.5	内: ココナツ 外: ココナツ	良好	~1mmの透白色砂粒 ~1.5mmの白色砂粒	内: 浅埋深 100 6.3、埋込 7.0 7.0 外: 比高+埋深 7.0 7.4	埋没→ 露出部	
139	5005	土留部	塊	根元径 4.0、枕高 1.4	内: ココナツ 外: ココナツ	良好	~1mmの白色砂粒	内: 浅埋深 100 6.0 外: 埋込 100 6.0	埋没→ 露出部	
140	5005	土留部	塊	根元径 4.0、枕高 2.1	内: ココナツ 外: ココナツ	良好	~1.5mmの透白色砂粒 ~2.5mmの白色砂粒	内: 埋込 7.0 6.0 外: 比高+埋深 7.0 6.0	埋没→ 露出部	○
141	5005	土留部	塊	根高 6.0、枕高 2.7	内: ココナツ 外: ココナツ	中々良	~2mmの白色砂粒	内: 埋込 100 6.0 外: 埋込 100 6.0	埋没→ 露出部	○
142	5005	土留部	塊	根元径 4.0、枕高 3.4	内: ココナツ 外: ココナツ	中々良	~1mmの白色砂粒	内: 比高+埋深 100 7.0 外: 比高+埋深 100 7.0	埋没→ 露出部	
143	5005	土留部	塊	根元径 4.0、枕高 3.2	内: ココナツ→ナツ(1号基礎) 外: ココナツ→ナツ(1号基礎)	良好	埋込	内: 埋込 100 6.0 外: 埋込 100 6.0	埋没→ 露出部	
144	5005	土留部	塊	根元径 4.0、枕高 3.2	内: ココナツ 外: ココナツ	良好	~2mmの白色砂粒	内: 比高+埋深 100 7.0 外: 埋込 100 6.0	埋没→ 露出部	○
145	5005	土留部	塊	枕高 7.0	内: 埋込ナツ 外: 埋込ナツ→ナツ	良好	~2mmの透白色砂粒	内: 比高+埋深 100 7.0 外: 埋込 100 6.0	比高埋没→ 露出部	○
146	5005	白磁	碗	根元径 18.0、枕高 5.0	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	埋込	表層: 比高 6.0 枕: 埋込 7.0 7.3	比高埋没→ 露出部	○ (晋)
147	5005	白磁	碗	根元径 16.2、枕高 5.2	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	~1mmの砂粒	表層: 比高 6.0 枕: 埋込 7.0 7.1	比高埋没→ 露出部	○
148	5005	白磁	碗	枕高 5.0	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	埋込	表層: 比高 6.0 枕: 埋込 7.0	比高埋没→ 露出部	
149	5005	白磁	片断 (土片)	枕高 2.0	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→ナツ(1号基礎)	良好	~1mmの砂粒	表層: 比高 6.0 枕: 埋込 7.0、埋込 100 5.0	比高埋没→ 露出部	
150	5005	土製品	布瓦土部	長 4.9、幅 1.1	—	—	~1mmの砂粒	比高+埋深 100 7.4	露出部	○ 露出
151	5005	土製品	布瓦土部	長 4.2、幅 1.1	—	—	~1mmの白色砂粒	埋込 100 6.0	露出部	○ 露出
152	5005	土製品	布瓦土部	長 4.0、幅 1.0	—	—	~1mmの白色砂粒	埋込 2.0 7.4、埋込 2.0 5.0	露出部	○ 露出
153	5005	土製品	布瓦土部	枕長 5.2、幅 1.4	—	—	~1.5mmの白色砂粒	比高+埋深 100 7.0	埋没露出部	○ 露出
154	5005	土製品	布瓦土部	枕長 2.5、幅 1.0	—	—	埋込	表層 2.0 5.0	露出部	○ 露出
155	5005	石製品	碇石	枕長 6.0、幅 6.0、重量 71.9kg	—	—	埋込砂粒	浅埋深 100 6.0	小片	○ 埋込土部
156	5005	石製品	碇石	枕長 17.0、幅 6.7、重量 500.6kg	—	—	埋込砂粒	埋込 2.0 6.0	1/4程度	○ 埋込土部
157	5004	礎石部	巻	枕高 2.9	内: 埋込ナツ(1号基礎) 外: 埋込ナツ(透心)	良好	~1mmの砂粒少量	内: 埋込 8.0 外: 埋込 8.0	埋没→ 露出部	○
158	5004	礎石部	巻	枕高 3.3	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	埋込	表層: 埋込 6.0 枕: 埋込 7.0→埋込 2.0 6.0	露出部	○ 表露
159	5004	土留部	小根	根元径 18.0、根元径 8.7、枕高 1.0	内: ココナツ 外: ココナツ→埋込(埋込部)	良好	~1mmの白色砂粒	内: 比高+埋深 100 7.0 外: 埋込 100 6.0	1/4程度	
160	5004	土留部	柱	根元径 6.2、枕高 1.5	内: ココナツ 外: ココナツ→埋込(埋込部)	良好	~1mmの白色砂粒	内: 浅埋深 100 6.0 外: 浅埋深 100 6.0	埋没部	○
161	5004	土留部	柱	根元径 5.2、枕高 1.0	内: ココナツ 外: ココナツ→埋込(埋込部)	良好	~1mmの透白色砂粒	内: 埋込 100 6.0 外: 埋込 100 6.0	露出部	
162	5004	土留部	塊	根元径 5.0、枕高 2.0	内: ココナツ 外: ココナツ→ナツ	良好	~2mmの白色砂粒	内: 埋込 100 6.0 外: 埋込 100 6.0	埋没→ 露出部	○
163	5004	土留部	小根	根元径 9.0、根高 1.7	内: ココナツ→ナツ 外: ココナツ→ナツ	良好	~1mmの白色砂粒	内: 埋込 2.0 6.0 外: 埋込 2.0 5.0	1/4程度	
164	5004	土留部	柱	枕高 3.0	内: 埋込ナツ→ナツ 外: 埋込ナツ→ナツ	良好	~2mmの砂粒	内: 比高+埋深 100 6.0 外: 比高+埋深 100 5.0	比高埋没→ 露出部	○
165	5004	礎石部	巻	枕高 3.2	内: 埋込ナツ 外: 埋込ナツ	良好	~2mmの白色砂粒	内: 埋込 7.0、埋込 8.0 外: 埋込 7.0	比高埋没→ 露出部	○ 図表添
166	5004	白磁	碗	根元径 12.0、枕高 2.4	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	埋込	表層: 比高 6.0 枕: 埋込 6.0	比高埋没→ 露出部	○ (晋)
167	5004	白磁	碗	枕高 2.9	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	~2mmの透白色砂粒少量	表層: 比高 6.0 枕: 埋込 7.0	比高埋没→ 露出部	○ (晋)
168	5004	白磁	碗	枕高 2.3	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	埋込	表層: 比高 6.0 枕: 埋込 7.0	比高埋没→ 露出部	○ (晋)
169	5004	青磁	碗	枕高 2.4	内: ココナツ→埋込 外: ココナツ→埋込	良好	埋込	表層: 比高 7.0 7.0 枕: 埋込 7.0→埋込 2.0 5.0	比高埋没→ 露出部	○ 図表添
170	5004	青磁	碗	枕高 2.7	内: ココナツ→埋込(透心)→埋込 外: ココナツ→埋込(透心)→埋込	良好	埋込	表層: 比高 7.0 7.0 枕: 埋込 7.0→埋込 6.0	露出部	○ 埋込土部
171	5005	礎石部	塊	根元径 4.0、枕高 3.1	内: 埋込ナツ→ナツ 外: 埋込ナツ→ナツ	良好	~1mmの白色砂粒	内: 埋込 6.0 外: 埋込 6.0	埋没→ 露出部	○
172	5005	土留部	塊	根元径 16.7、根元径 6.0、 枕高 5.0	内: ココナツ→ナツ(1号基礎) 外: ココナツ→埋込(1号基礎)→ナツ(1号基礎)	良好	埋込	内: 比高埋深 100 5.0 外: 埋込 100 6.0	1/4程度	○

表4 出土遺物観察表4

発掘番号	出土遺物	種別	器種	法 量 (kg)	調整	状態	形 上	色 調	残 存	備 考
171	30050	土師器	埴	横穴式石室 6.6、横高 2.0	内：コナノナギ 外：コナノナギ	良好	～2mmの白色砂粒 ～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 1.00 6.0 外：黄褐色 1.00 6.0	土師器片 土師器片	○
173	30051	瓦葺土師	埴	横高 2.7	内：同編ナギ 外：同編ナギ→ナギ	良好	～1mmの白色砂粒	内：黄褐色 1.00 6.0 外：黄褐色 1.00 6.0	土師器片 土師器片	○
174	30052	石製土	不明	横長 4.8、横高 2.5、重量 27.7kg	—	—	—	—	小片	○
176	30053	鉄製土	鉄釘	横長 6.1、幅 0.7	鋼造	—	—	—	土師器片	○
177	30056	土師器	埴	横穴式石室 6.2、横高 1.5	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器	良好	～2mmの白色砂粒	内：土師器 1.00 7.0、土師器 1.00 6.0 外：土師器 1.00 7.0、土師器 1.00 6.0	土師器片	○
179	30056	土師器	埴	横高 2.4	内：同編ナギ 外：同編ナギ→ナギ	良好	～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 6.0 外：黄褐色 6.0	土師器片	○
179	30056	泥瓦葺土師	埴	横穴式石室 10.6、横高 1.3	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器	良好	～3mmの白色砂粒	内：黄褐色 7.0 外：黄褐色 7.0	土師器片	○
180	30056	白磁	碗	横穴式石室 2.6、横高 1.6	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→ナギ	良好	鋼造	赤褐色 1.00 1.0 6.0 赤褐色 1.00 1.0 6.0	土師器片	○
181	30057	白磁	碗	横高 1.9	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 6.0 赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
182	30057	白磁	蓋	横高 1.3	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 6.0 赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
183	30057	白磁	蓋	横穴式石室 4.6、横高 2.2	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	～1mmの白色砂粒	赤褐色 1.00 6.0 赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
184	30057	土師器	赤瓦土師	横 4.5、幅 1.0	—	—	—	赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
185	30058	土師器	小埴	横穴式石室 6.6、横高 1.2	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器(土師器片)	良好	～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 10.0 6.0 外：黄褐色 10.0 6.0	土師器片	○
186	30058	土師器	埴	横穴式石室 14.4、横高 3.0	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器	良好	～3mmの白色砂粒	内：黄褐色 2.0 外：黄褐色 2.0	土師器片	○
187	30058	土師器	埴	横穴式石室 6.6、横高 1.6	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器	良好	～3mmの白色砂粒	内：土師器 1.00 7.0 外：土師器 1.00 7.0	土師器片	○
188	30058	土師器	埴	横長 6.4、横高 2.3	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器(土師器片)	良好	～3mmの白色砂粒	内：黄褐色 2.0 6.0 外：土師器 1.00 7.0	土師器片	○
189	30058	土師器	埴	横長 5.6、横高 2.1	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器	良好	～2mmの白色砂粒	内：土師器 6.0 外：土師器 6.0	土師器片	○
190	30058	土師器	埴	白磁 16.7、横穴式石室 2.2、横高 6.0	内：コナノナギ 外：コナノナギ	小片良好	～1mmの白色砂粒	内：黄褐色 10.0 外：黄褐色 10.0	土師器片	○
191	30058	土師器	埴	横長 6.6、横高 1.2	内：コナノナギ 外：コナノナギ	良好	～1mmの白色砂粒	内：土師器 10.0 6.0 外：黄褐色 10.0 6.0	土師器片	○
192	30058	土師器	埴	横穴式石室 6.6、横高 2.10	内：コナノナギ 外：コナノナギ	良好	～1mmの白色砂粒	内：黄褐色 6.0 外：黄褐色 6.0	土師器片	○
193	30058	土師器	埴	横穴式石室 2.6、横高 1.9	内：コナノナギ→ナギ 外：コナノナギ→ナギ	良好	鋼造	内：黄褐色 2.0 6.0 外：黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
194	30058	瓦葺	埴	横穴式石室 5.6、横高 1.7	内：コナノナギ→ナギ 外：コナノナギ	良好	～1mmの白色砂粒	内：黄褐色 4.0 外：黄褐色 4.0	土師器片	○
195	30058	瓦葺	埴	横穴式石室 6.6、横高 2.1	内：コナノナギ→ナギ 外：コナノナギ	良好	～1mmの白色砂粒	内：黄褐色 7.0 外：黄褐色 7.0	土師器片	○
196	30058	白磁	碗	横高 3.2	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 6.0 赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
197	30058	白磁	碗	横高 3.5	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 7.0 赤褐色 1.00 7.0	土師器片	○
198	30058	白磁	碗	横高 3.5	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 7.0 赤褐色 1.00 7.0	土師器片	○
199	30058	白磁	碗	横穴式石室 6.6、横高 1.7	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 7.0 赤褐色 1.00 7.0	土師器片	○
200	30058	青磁	碗	横穴式石室 14.6、横高 2.3	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 7.0 赤褐色 1.00 7.0	土師器片	○
201	30058	青磁	碗	横穴式石室 13.4、横高 1.8	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 6.0 赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
202	30058	土師器	埴	横高 1.2	内：コナノナギ 外：コナノナギ	良好	鋼造	内：黄褐色 2.0 6.0 外：黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
203	30058	土師器	赤瓦土師	横長 1.4、幅 1.4	—	—	～1mmの白色砂粒	黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
204	30058	土師器	赤瓦土師	横長 2.7、幅 1.0	—	—	～1mmの白色砂粒	黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
205	30058	土師器	赤瓦土師	横長 2.5、幅 1.1	—	—	～1mmの白色砂粒	赤褐色 1.00 6.0、黄褐色 1.00 6.0	土師器片	○
206	30059	物上土師	埴	横長 7.2、横高 3.3	内：コナノナギ	良好	～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 2.0 外：黄褐色 2.0	土師器片	○
207	30059	土師器	埴	白磁 11.8、横長 7.1、横高 3.4	内：コナノナギ→ナギ 外：コナノナギ→同編土師器(土師器片)	良好	～3mmの白色砂粒 ～1mmの白色砂粒	内：黄褐色 4.0、黄褐色 2.0 6.0 外：黄褐色 2.0 6.0、黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
208	30060	土師器	埴	横穴式石室 6.4、横高 1.5	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器	小片良好	～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 2.0 6.0 外：黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
209	30061	土師器	埴	横高 1.2	内：同編ナギ 外：同編ナギ	良好	～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 2.0 6.0 外：黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
210	30063	白磁	碗	横穴式石室 15.6、横高 2.9	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 6.0 赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
211	30063	白磁	碗	横穴式石室 6.4、横高 1.6	内：コナノナギ→同編土師器 外：コナノナギ→同編土師器	良好	鋼造	赤褐色 1.00 6.0 赤褐色 1.00 6.0	土師器片	○
212	30064	泥瓦葺土師	埴	横高 2.6	内：同編ナギ 外：同編ナギ→ナギ	良好	～1.5mmの白色砂粒	内：黄褐色 6.0 外：黄褐色 6.0	土師器片	○
213	30064	泥瓦葺土師	埴	横穴式石室 6.6、横高 1.9	内：コナノナギ 外：コナノナギ→同編土師器	良好	～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 2.0 6.0 外：土師器 1.00 7.0	土師器片	○
214	30064	瓦葺	埴	横穴式石室 6.6、横高 1.6	内：コナノナギ→ナギ 外：コナノナギ→ナギ	小片良好	～3mmの白色砂粒 ～1mmの白色砂粒	内：黄褐色 2.0 6.0、黄褐色 2.0 6.0 外：黄褐色 2.0 6.0	土師器片	○
215	30064	泥瓦葺土師	埴	横高 2.2	内：同編ナギ 外：同編ナギ	良好	～2mmの白色砂粒	内：黄褐色 7.0 外：黄褐色 7.0	土師器片	○

表5 出土遺物観察表5

発掘番号	出土品種	種別	品類	法量 (cm)	調整	状況	粘土	色調	残存	備考
218	3004 3301	白磁	碗	高さ 3.8	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	茶色: 灰白 6.3 緑: 灰白 7.2	口縁部	○ (青)
217	3004 3301	白磁	碗	底径 13.4, 高さ 3.8	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	茶色: 灰白 5.3 緑: 灰白 7.2	口縁部 底面	○
218	3004 3301	土製品	石丸土器	径長 4.4, 残幅 1.4	—	—	—	灰色 土色: 黄緑 10.1 7.5	口縁部	○
219	3004 3301	土製品	石丸土器	径長 3.8, 残幅 1.9	—	—	—	焼成 土色: 黄緑 10.1 7.2	底面	○
220	3005	土製品	碗	底径 16.6, 高さ 3.4	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 外: 2.5mmの白色砂粒	底面 口縁部	○
221	3471	瓦器	碗	底径 16.6, 高さ 2.9	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 外: 底面黄緑 6.3, 土色: 黄緑 10.1 6.4	底面 口縁部	○
222	3471	瓦器	碗	底径 16.6, 高さ 1.8	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 2.7mmの白色砂粒	底面	○
223	3471	瓦器	碗	底径 16.6, 高さ 2.4	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 外: 底面黄緑 6.3, 黄緑 10.1 6.1	底面 口縁部	○
224	3471	瓦器	碗	底径 8.6, 高さ 3.4, 重量 219.17g	—	—	—	—	底面	○
225	3301	土製品	土器	高さ 1.9	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
226	3301	土製品	土器	高さ 4.9	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
227	3733	土製品	碗	底径 16.6, 高さ 3.5	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 灰白 6.3 外: 灰白 6.7	底面 口縁部	○
228	3733	土製品	小皿	底径 10.6, 高さ 1.2	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
229	3736	瓦器	碗	底径 16.6, 高さ 6.8	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 6.3 外: 底面黄緑 10.1 6.2	底面 口縁部	○
230	3711	土製品	土器	高さ 3.4	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
231	3711	土製品	土器	高さ 5.8	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	茶色: 灰白 6.3 緑: 灰白 7.2	口縁部 底面	○
232	3736	白磁	碗	底径 16.6, 高さ 2.9	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	茶色: 灰白 5.3 緑: 灰白 7.2	底面 口縁部	○ (V-6)
233	3712	白磁	盆	高さ 5.4	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	茶色: 灰白 5.3 緑: 土色: 黄緑 10.1 6.2	口縁部	○
234	瓦土	粘土土器	盆	底径 11.5, 高さ 5.7	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 6.3 外: 土色: 黄緑 7.2 7.4	口縁部 底面	○
235	瓦土	土製品	高杯	高さ 2.2	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 6.4	底面	○
236	瓦土	土製品	高杯	高さ 4.2	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
237	瓦土	土製品	土器	高さ 5.4	ナデ, オサエ	良好	焼成	内: 土色: 黄緑 10.1 7.2	底面	○
238	瓦土	土製品	中台土器	高さ 1.4	内: ナデ, オサエ 外: ナデ, オサエ	中台土器	—	内: 黄緑 10.1 6.2 外: 灰白 10.1 6.2	底面 口縁部	○
239	瓦土	茶色陶	盆	底径 10.6, 高さ 3.6	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
240	瓦土	茶色陶	盆	径長 5.4, 残幅 6.6, 重量 47g	—	—	—	内: 黄緑 10.1 6.3, 黄緑 10.1 6.1 外: 黄緑 10.1 6.1, 黄緑 10.1 6.1	口縁部	○
241	瓦土	緑釉陶器	碗	高さ 3.8	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	茶色: 黄緑 10.1 6.4 緑: 黄緑 10.1 6.2	口縁部	○
242	瓦土	緑釉陶器	碗	高さ 2.3	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	茶色: 灰白 7.2 7.4 緑: 灰白 7.2 7.4	底面 口縁部	○
243	瓦土	緑釉陶器	碗	底径 16.6, 高さ 2.7	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	茶色: 灰白 5.3 緑: 灰白 7.2	底面 口縁部	○
244	瓦土	緑釉陶器	碗	高さ 6.7	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	茶色: 灰白 7.2 緑: 黄緑 10.1 7.4	口縁部	○
245	瓦土	土製品	碗	底径 16.6, 高さ 2.2	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 6.3 外: 黄緑 10.1 6.2	口縁部	○
246	瓦土	土製品	碗	底径 16.6, 高さ 1.1	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 6.2 外: 土色: 黄緑 10.1 7.4	底面 口縁部	○
247	瓦土	黒色土器	底面	底径 6.7, 高さ 1.6	内: コロナデ 外: コロナデ	中台土器	—	内: 土色: 黄緑 7.2 7.4 外: 灰白 6.3	底面 口縁部	○
248	瓦土	瓦器	碗	口径 15.2, 底径 6.1, 高さ 5.4	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 6.3 外: 土色: 黄緑 10.1 7.2	口縁部	○
249	瓦土	瓦器	碗	高さ 3.2	内: コロナデ 外: コロナデ	中台土器	—	内: 灰白 6.3 外: 土色: 黄緑 10.1 7.2	底面 口縁部	○
250	瓦土	瓦器	碗	底径 6.5, 高さ 1.5	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 6.2 外: 灰白 10.1 6.2	底面 口縁部	○
251	瓦土	瓦器	碗	底径 16.6, 高さ 3.1	内: コロナデ 外: コロナデ	良好	焼成	内: 黄緑 6.3 外: 黄緑 10.1 6.1	底面 口縁部	○
252	瓦土	土製品	土器	高さ 3.2	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
253	瓦土	土製品	土器	高さ 3.1	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
254	瓦土	土製品	土器	高さ 6.8	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 底面黄緑 6.3 外: 土色: 黄緑 7.2 7.4	口縁部 底面	○
255	瓦土	土製品	土器	高さ 6.8	ナデ, オサエ	良好	焼成	内: 黄緑 10.1 6.3, 土色: 黄緑 6.4	口縁部	○
256	瓦土	瓦質土器	鉢	高さ 3.6	内: 陶器 外: 陶器	中台土器	—	内: 灰白 10.1 6.2	口縁部	○
257	瓦土	瓦質土器	鉢	高さ 4.9	内: 陶器 外: 陶器	中台土器	—	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○
258	瓦土	陶器	鉢	高さ 2.7	内: 陶器 外: 陶器	良好	焼成	内: 2.5mmの白色砂粒	口縁部	○

表6 出土遺物観察表6

発掘番号	山上遺構	種別	設備	法量(m ³)	調査	状況	取上	表測	残存	備考
270	表土	白磁	網	横穴口径19.6、残高4.0	内：コソリター→集物 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	白磁器→ 漆器片	○ (取)
280	表土	白磁	網	横穴口径15.6、残高2.9	内：コソリター→集物 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 6.4 縦：横穴口径 2.1	白磁器片	○ (取)
300	表土	白磁	網	横穴口径15.6、残高3.0	内：コソリター→集物 外：コソリター→磁器片・文→集物	良好	網取	測深：横穴口径 8.0 縦：横穴口径 2.1	白磁器片	○ (取)
302	表土	白磁	網	残高4.5	内：コソリター→集物 外：コソリター→磁器片・文→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	白磁器片	○ (取)
303	表土	白磁	網	残高3.5	内：コソリター→集物 外：コソリター→磁器片・文→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ (取)
304	表土	白磁	網	横穴口径13.4、残高3.1	内：コソリター→集物 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	白磁器→ 漆器片	○ (取)
305	表土	白磁	網	横穴口径7.0、残高2.4	内：コソリター→集物 外：コソリター→コソリター→集物	良好	～1mmの黑色砂粒	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	磁器→ 漆器片	○ (取)
306	表土	白磁	網	横穴口径5.2、残高2.9	内：コソリター→集物 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	磁器→ 漆器片	○ (取)
307	表土	白磁	網	横穴口径4.4、残高2.4	内：コソリター→集物 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 4.4 縦：横穴口径 2.1	白磁器→ 漆器片	○ (取)
308	表土	白磁	瓦	横穴口径4.2、残高1.10	内：コソリター→集物→漆器片取り 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	磁器→ 漆器片	○ (取)
309	表土	青磁	網	横穴口径18.6、残高5.1	内：コソリター→集物→集物 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 3.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ (取)
320	表土	青磁	網	残高3.4	内：コソリター→集物 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 3.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ (取)
373	表土	青磁	網	横穴口径4.4、残高2.7	内：コソリター→集物→漆器片取り 外：コソリター→コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 10.0 2.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片→ 漆器片	○ (取)
374	表土	青磁	網	横穴口径5.6、残高2.4	内：コソリター→集物→漆器片取り 外：コソリター→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ (取)
375	表土	陶器	赤土器 茶器	残高4.1	内：コソリター 外：コソリター→集物	良好	～1mmの白色砂粒	測深：横穴口径 4.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ (取)
376	表土	陶器	赤土器	横穴口径4.0、残高5.0	内：コソリター 外：コソリター→集物	良好	～1mmの白色砂粒	測深：横穴口径 4.0 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ (取)
378	表土	瓦葺	瓦葺	横穴口径5.6、横穴口径11.1、残高1.5	内：瓦葺片→集物 外：瓦葺片→集物	良好	網取	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ (取)
276	表土	土製品	瓦葺土葺	長さ5.5、幅1.3	—	—	網取	測深2.1径4.4、横穴口径2.1	瓦葺	○ 採取
277	表土	土製品	瓦葺土葺	長さ4.5、幅1.2	—	—	～1mmの白色砂粒	測深10.0 2.1	瓦葺片	○ 採取
279	表土	土製品	瓦葺土葺	長さ4.2、幅1.6	—	—	網取	測深10.0 2.1	瓦葺	○ 採取
279	表土	土製品	瓦葺土葺	長さ3.8、幅1.5	—	—	～2mmの白色砂粒	測深2.1径2.5、横穴口径3.1径3.2	瓦葺片	○ 採取
280	表土	土製品	瓦葺土葺	長さ4.4、幅1.25	—	—	～1mmの白色砂粒	測深2.5径3.2	瓦葺	○ 採取
283	表土	土製品	瓦葺土葺	残高2.9、幅1.2	—	—	網取	測深2.1径3.2	土陶器欠 損	○ 採取
301	表土	土製品	瓦葺土葺	残高3.7、幅1.2	—	—	網取	測深2.1径3.2	漆器片	○ 採取
303	表土	土製品	瓦葺土葺	残高2.9、幅1.0	—	—	～1mmの砂粒	測深2.1径3.2、横穴口径10.0 2.1	陶器類欠 損	○ 採取
304	表土	土製品	瓦葺土葺	残高3.3、幅1.4	—	—	網取	測深10.0 2.1	陶器類欠 損	○ 採取
305	表土	土製品	瓦葺土葺	残高3.1、幅1.1	—	—	網取	測深3.2	土陶器欠 損	○ 採取
286	表土	土製品	瓦葺土葺	残高2.5、幅0.9	—	—	網取	測深2.1径3.2	陶器類欠 損	○ 採取
287	表土	土製品	編目口	残高4.2、残高3.4	—	—	—	—	漆器片	○ 採取
288	表土	石製品	石碓	残高2.6	ノコぎ	—	採取	内：径 6 外：直径2.5径2.2	白磁器片	○ 採取
289	表土	石葺	石葺丁	残高2.5、残高2.1、残高0.6、 高さ3.2m	—	—	採取	測深10.0 2.1、横穴口径2.1	漆器片	○ 採取
290	表土	鉄器	鉄碓	残高4.3、残高2.3	網取	—	—	—	漆器片	○ 採取
291	表土	鉄器	鉄釘	長さ11.4、横穴口径11.0、残高1.1	網取	—	—	—	漆器片	○ 採取
291	包査層 トレンチ内	磁器器	埴	口径11.4、横穴口径11.0、残高1.1	内：陶片→土 外：陶片→土	良好	～2mmの白色砂粒	内径：横穴口径 6.0	漆器片	○ 採取
294	包査層 トレンチ内	磁器器	埴	横穴口径 6.6、残高2.9	内：陶片→土 外：陶片→土	良好	～1mmの白色砂粒	内：横穴口径 2.1 外：横穴口径 2.1	漆器片	○ 採取
294	包査層 トレンチ内	磁器器	埴	横穴口径11.2、残高5.4	内：陶片→土 外：陶片→土	良好	～1mmの白色砂粒	内：横穴口径 2.1 外：横穴口径 2.1	漆器片	○ 採取
295	包査層 トレンチ内	磁器器	埴	残高3.9	内：陶片→土 外：陶片→土	良好	～1mmの白色砂粒	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ 採取
296	包査層 トレンチ内	磁器器	埴	横穴口径7.6、残高6.7	内：コソリター→集物 外：コソリター→集物	良好	～1mmの白色砂粒	測深：横穴口径 2.1 縦：横穴口径 2.1	漆器片	○ 採取
297	包査層 トレンチ内	土陶器	土葺	横穴口径4.9、残高6.1、残高6.9	内：コソリター→土 外：コソリター→陶器類欠損	良好	～3mmの白色砂粒	内：横穴口径 2.1 外：横穴口径 2.1	漆器片	○ 採取
298	包査層 トレンチ内	土陶器	埴	横穴口径6.6、残高2.9	内：コソリター 外：コソリター	良好	～1mmの白色砂粒	内径：横穴口径 2.1 外：横穴口径 2.1	漆器片	○ 採取
299	包査層 トレンチ内	瓦葺	埴	口径10.5、残高6.5、高さ5.7	内：陶片→土 外：陶片→土	良好	～2mmの白色砂粒	内：横穴口径 2.1、横穴口径 2.1、横穴口径 2.1	漆器片	○ 採取
300	包査層 トレンチ内	土製品	瓦葺土葺	長さ4.6、幅1.25	—	—	～1mmの白色砂粒	測深2.1径2.2	瓦葺	○ 採取
301	包査層 トレンチ内	土製品	瓦葺土葺	残高2.9、残高1.7	—	—	～2mmの白色砂粒	測深2.1径3.2、横穴口径2.1径3.2	漆器片	○ 採取

表7 出土遺物観察表7

第4章 結 語

以上、辻垣下出口遺跡の発掘調査成果を報告してきた。今回の調査では掘立柱建物1棟、土坑24基、井戸1基、溝15条、柵列2条、多くの柱穴など、多様な遺構を検出した。出土遺物は縄文時代の石器、弥生土器や近世の磁器なども若干含むが、概ね古墳時代から鎌倉時代に位置付けられ、特に平安時代から鎌倉時代初頭の遺物が多く出土した。

遺構の内容は報告してきた通りだが、集落を構成したと考えられる遺構は掘立柱建物1棟、土坑数基（2段掘りのSK011は井戸の可能性あり）、井戸1基、柵列2条であり、土坑の多く、溝、不明遺構などは深さが数cmから20cmほどしかなく、多くは流路の底面と考えられる。辻垣下出口遺跡は京都平野を北流する祇川下流域東岸の標高10m以下に立地し、祇川の流れによって運ばれた土砂が堆積した三角州上に形成された遺跡である。近年の祇川下流域における洪水の発生事例は管見に及ばないが、往時の流路は現在より蛇行し、流域がたびたび洪水の被害に見舞われたことは想像に難くない。すなわち当地は祇川の氾濫原であり、その流路の底面の痕跡が本書で報告した遺構の大半といえる。このことは、周辺で調査が行われた複数の遺跡に共通する。国道10号線の行橋バイパスや椎田道路建設に先立ち発掘調査された津留遺跡、辻垣ヲサマル遺跡など、本遺跡と同様に元永地区の県営ほ場整備事業で発掘調査された津留足尾遺跡、辻垣下河原遺跡などでも同様の流路痕跡が確認されている。この流路跡に伴って出土した遺物は、洪水で被災した集落より副次的にもたらされたものが大半と考えられよう。

出土遺物は上記したように古墳時代から鎌倉時代に比定されるものが多く、特に平安時代から鎌倉時代でも初頭までの遺物が大半を占める。平安時代頃の特筆すべき遺物として、須恵器の甕を再加工した猿面硯が挙げられる。猿面硯の出土は行橋市内でも初例であり、硯自体の出土も福原長者原官衙遺跡や延永ヤヨミ園遺跡など数点しかない希少品である。また一般的に奢侈品と考えられている緑軸陶器も比較的多く出土したが、土師質の防長産に加え、篠栗や洛西窯など畿内産、または近江産と考えられる須恵質の緑軸陶器が3片出土したことは特筆に値する。このことは古代仲津郡の支配者層の一部が近隣にいた証左であり、あるいは公的施設の存在も予感させるものである。また、出土遺物の中で目立つのが中国産の白磁である。主に平安時代後期から鎌倉時代初頭の12世紀に比定されるものであり、共存する青磁も同安窯系、また龍泉窯系でも蓮弁文を持たない12世紀までのものに限られることは注目に値する。

以上のことから、辻垣下出口遺跡の調査成果を総括すると、調査地点は祇川の氾濫原で、集落も営まれたが、たびたびの洪水に見舞われた。平安時代前期には仲津郡の公的施設が近隣に存在した可能性があり、平安時代後期から鎌倉時代初頭には調査地も含め周辺で集落が営まれたが、13世紀以降は田畑となり、今井まで一連の条里として開墾され、現在に至っていることが分かった。

巻末にあたり、報告者として大変心残りなのは、調査当時に遺跡現地に立てなかったことである。柱穴が多くあるのに掘立柱建物の検証が全くできず、この遺構からこの遺物が出土した、という短調的な報告になってしまった。こういった本書ではあるが、地域史発展の一助になることを願っている。

圖 版



(1947年3月11日撮影 写真名USA-M122-2 国土地理院ウェブサイトより)

辻垣下出口遺跡の位置



辻垣下出口遺跡全景（上が南東）

1. SK011 遺物出土状況
(南東から)



2. SK011 (南東から)



3. SE041 (南東から)



図版4 溝



1. SD051 (南西から)



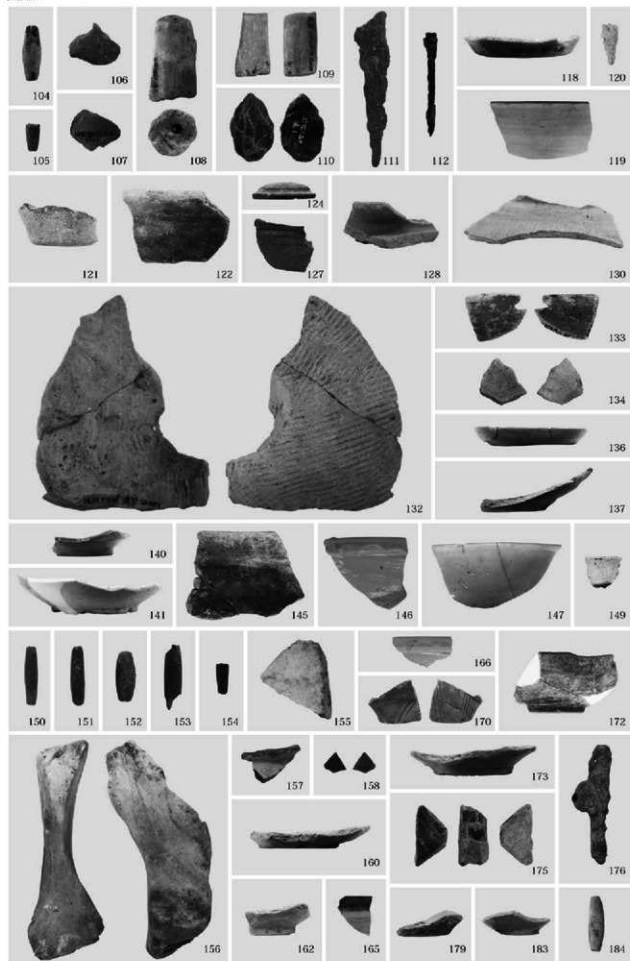
2. SD051 白磁小壺出土状況

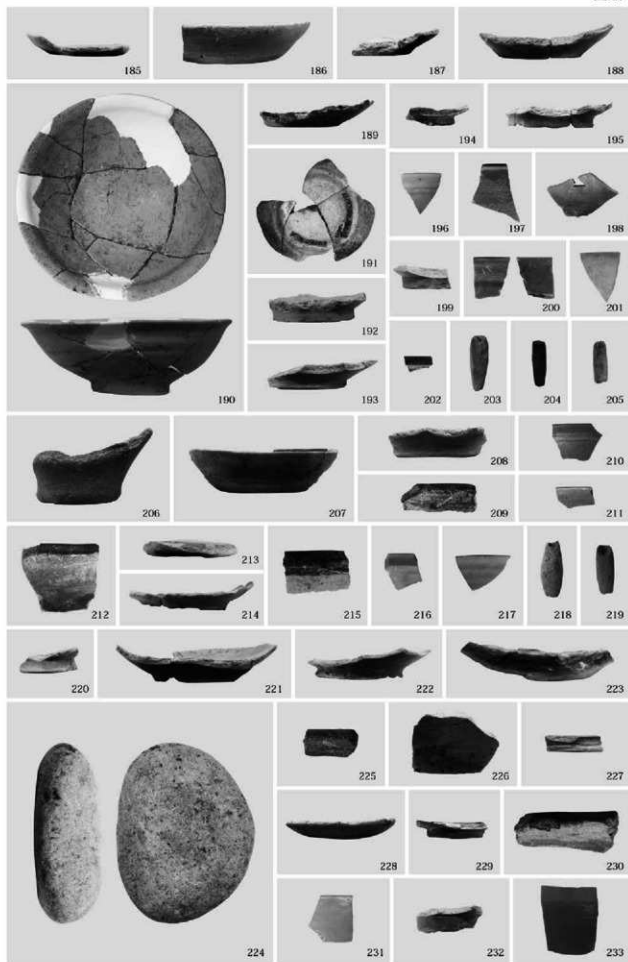


3. SD052 (北東から)

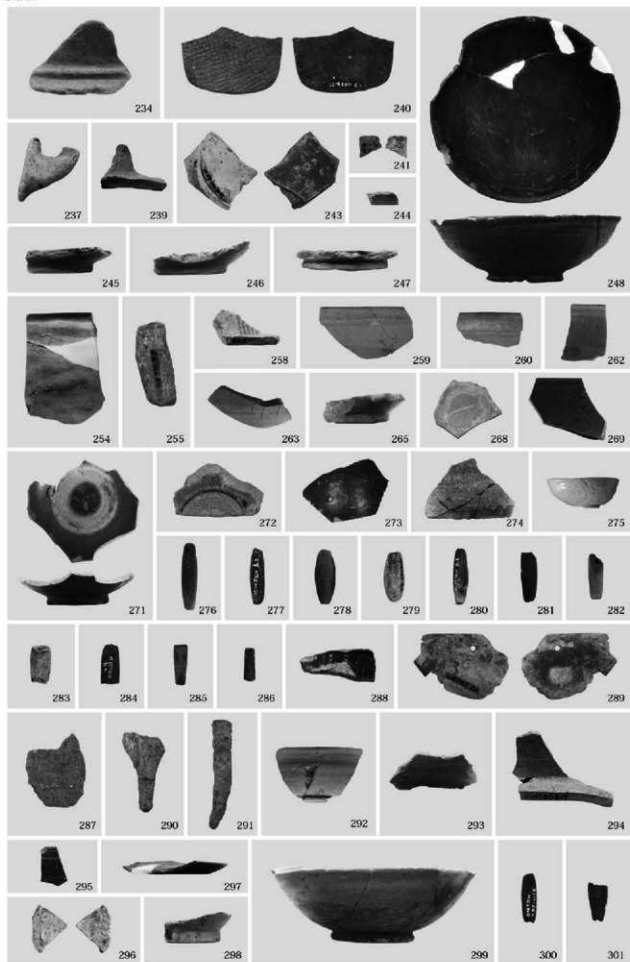


図版 6 出土遺物





出土遺物3



報告書抄録

ふりがな	つじがきしもでぐちいせき							
書名	辻垣下出口遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（元永地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告3							
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第66集							
編著者名	山口裕平							
編集機関	行橋市教育委員会							
所在地	〒824-8601 福岡県行橋市中央一丁目1番1号 TEL 0930-25-1111 FAX 0930-25-1582							
発行年月日	2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
つじがきしもでぐちいせき 辻垣下出口遺跡	福岡県行橋市 大字辻垣 527・ 528・529・536 番地	402133	14046004	33° 42' 21"	130° 00' 21"	20010417 ～ 20010903	4,900㎡	県営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
辻垣下出口遺跡	集落 流路	弥生時代～鎌倉時代	掘立柱建物、土坑、 井戸、溝、欄列、柱穴	弥生土器、土師器、須 恵器、緑釉陶器、瓦器、 瓦質土器、輸入陶磁器 (白磁・青磁・陶器)、 石庖丁、砥石、鉄釘	猿面硯が出土			
要約	<p>京都平野北部を北流する、祇川下流域東岸の三角州（標高約10m）に立地する。</p> <p>主に弥生時代～鎌倉時代に至る、遺構、遺物を検出したが、平安時代から鎌倉時代初頭に盛期を認められる。集落を形成する遺構は掘立柱建物、井戸などがあるが、本調査区は祇川の氾濫原であったと考えられ、流路跡と考えられる帯状の浅い土坑、溝を多く検出した。遺物の大半はこの流路跡に伴うものである。</p> <p>特筆すべき遺物に、8～9世紀頃に位置づけられる須恵器の猿面硯がある。緑釉陶器も防長産に加えて畿内産や近江産を含み、古代伸津郡の公的施設が近隣に所在したと考えられる。</p> <p>出土する輸入陶磁器は白磁を中心とし、蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁をまったく含まないことから、12世紀末頃の鎌倉時代初頭には集落は廃絶し、田畑になったと考えられる。</p>							

2020年(令和2年)3月31日 発行

辻垣下出口遺跡

行橋市文化財調査報告書 第66集

著作権所有 福岡県行橋市中央一丁目1番1号

発行 行橋市教育委員会

印刷 福岡県行橋市大橋三丁目1番18号
株式会社 はら印刷